

---

# 須上ユイナの地球救済

大塩杭夢

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

須上ユイナの地球救済

### 【Nコード】

N8909M

### 【作者名】

大塩杭夢

### 【あらすじ】

普通の女子高生であるはずの須上ユイナは、超能力やヒーローなどの非現実的な現象に憧れを抱いていた。

そんな時に地球の危機ですよ。なんかキーパーソンになってます。

「地球の平和のためになんか頑張る！」

実は自分の欲求を満たすためだなんて言えない……。

やや中二風SF超常現象青春電波コメディー。

## 人物紹介（前書き）

「紹介と違って読み飛ばしても大丈夫か？」

「大丈夫だ、問題ない」

このようなちよつと古いネタを最新のつもりで語るような、そんな「イケテナイ」奴らが巻き起こす物語です。

## 人物紹介

須上結菜。

主人公。夢見人間。好奇心や探究心が強い、普通のティーンエイジャー。

作者は彼女についてなら熱く長々と語ることが出来る。

桜木春風。

格好つけたがる冷めた若者。常識的なことを言っておけば格好付くという思い込みもある。

作者は彼女についてなら結菜ほどではないが長々と語ることが出来る。

瀬尾夏鈴。

カリスマ。クラスの人気者。完璧な才女。作者はこういう人も好きである。

星野剣。

男っぽい女。強い。ひたすら強い。何か秘密があるのかも……ないのかも……。

姉御って感じですね。

須上瑞樹。

星野と似た性格。だけど固い。考え方が。現実の作者ポジ……だ  
といいなあ。

以下ネタバレ防止のため、雑。

坂本竜馬。偽名。アルスですよ本名。

光村雫。名前カッコイイ。

星熊透生。これで透生と読みます。

ヤシヤ。謎。

その他大勢。なかには物語のカギになる奴がいるかも……いないかも……。

## 人物紹介（後書き）

インハイ狙って大暴投って感じですがよろしくお願いします。

## 「私」紹介

馴染めない訳ではないんだけどさ。イケてる同級生の輪には入れなかった。というか入らなかつた。入ってたまるか。

恋とか何とか言っている奴も、進路がどうか言ってくる大人も、何というか全部が鬱陶しい。そんな感じの今日この頃。

進路がどうか考える前にさ、考えることがあるでしょうよ。人は死ぬんだよ。それに目を背けて将来の話なんてしてたって、意味なんて無いに決まってるじゃんか。

私は皆と違う。

誰よりも考えてるからクラスではちょっと浮いてるけど。だけど嫌われてないのは多分私が聡明だからだし、何と言うか……。

そういう風に心の中でぼやいてないと、怖くて潰されそうなんだよ。

「あーあ」

この深い溜息は若さの現れだって信じてる私がいるのである。うむ。

これでも色々悩んでんだよ。

人生がこんなにつまらないなら、いつそ死んだ方がマシだと思っただ。辛いことなんて何もなければ、心から笑えるようなこともほとんどない。

でも死のうかなーなんてことを少しでも思った瞬間、あの日のあれとかその日のそれとか思い出して、急に人生が楽しいものになっ

たような気がして。

仕方がないから一日待ってみたら、やっぱりつまらなくてやっ  
られなくて。

それじゃあやっぱり死のうと決心したと思っても、やっぱり未練  
が溢れて来て。

考えたらそもそも死ぬにふさわしい理由が一切ないから、遺書も  
全然書けない。

退屈だったからなんて書いたら、死んだ後に呆れられて恥ずかし  
い。

生きる方が、楽といえば楽なんだ、これが。もういい生きる。

なんてバカらしい葛藤を繰り返し、私は今日も退屈な人生を歩む  
のであった。

須上ユイナという一人の女子高校生、イコール私の日常である。  
要するに暇つてことですよ。

成績は中の上くらいで、部活はやってない。

……あと、テレビゲーム好き。……と、それくらいしかないかな。  
私の特徴とか人生とか語ろうと思っても、これ以上何も言えない  
んだ。振り返ると無意味な人生。きつとこれからも。

虚しい。価値も意味も何もない。生命活動をただ続けるだけの人  
形みたいな私。

きつと、意味が欲しいんだと思う。漫画やアニメの主人公がなん  
であんなに輝いているかって、スケールの大きな存在価値を持って  
いるからじゃん。

私は何の変哲もない恋愛漫画にハマれない。普遍性なんて無価値  
を自ら語るようなモノでしょ？

だからさ、探してみた。

やりたいこととか、叶えたい夢。何なら小さな目標でも、これ！

って言えるものをさ。

でも、大体何をやったって、結局はテレビゲームの方が面白いて結論に辿り着く。

現実なんて所詮、そんなものだ。本当につまらない。

二次元のなんと輝いていることか。魔王とかドラゴンとか超能力とか悪の組織とか！

そういう未知なるものには、ロマンがある。

きつと、この退屈な世界も変わるし、そうなれば私にも、存在価値とか、そういうものが見出せるようになるんだ。

間違えても今生で叶う望みではない。でも私はやっぱり、そういう憧れを捨てきれない。バカって言われるかもしれないけどさ。

## 平穩とそーでもない事件・上

波乱は突然に。

夢の始まりは、本当に急だった。

二〇一二年 六月。

七色町 須上家。

深夜一時。

降り続く雨の音にうんざりしながら、私はとりあえずパソコンでチャットをしていた訳です。

近頃の雨の降り方はおかしい。休校にはならなかったが、三日も連続で警報が出るなんてのはちょっとひどい。温暖化の影響なのかなーと思うと、世界の終わりつつても、結構近いような気がする。『ユイナ：そこで私はにらんだわけです。七色には超能力者がいるんじゃないかって』

実際に顔を合わせていなくても、ネットワークで離れた相手とコミュニケーションがとれる。

神秘なんてどこにもない時代。悲しい時代に生まれちゃったもんだなホント。

『セオ：超能力というか、それはプラズマです。……あの、眠いでそろそろ……』

『ハンゾー：それにしてもすごい雨ですね……。そっちもですか？』

『ユイナ：ですねえ。そんなに服部さん家と距離ないですけど』

『セオ：こっちも降ってます。雷とか落ちるかもね……』

瞬間。ピカ。

そして直後、私の部屋含み全世界が光に包まれいや全は嘘で頑張っても町内が限度だと思えますが轟く雷の暴力的な音がどばあああああん、と響いた。

「うわぁ……すごい」

瀬尾さんは預言者ですか。落雷ですよデカイの一発。音の大きさから考えると、結構近所に落ちたのではなからうか。

子供なら、ワーキヤー言ってテンション高くなるんだろうな！

でも私はこれくらいではしゃぐほど子供でもないんですよ。もう高校二年生ですよ。

けどね、残念ながら雷は単なるパフォーマンスではなく、ちゃんと実害もあるんですよ。

「……止まった」

私のパソコンの画面が止まりました。見事にピタリと止まったポーズ状態。

ずっとチャットの画面を映しっぱなしで変化無し！ やだもうパソコン死んだかも。

「あーあ」

溜息だけ、一人ぼっちの部屋に響く。

電灯はつけてない。明りは今や止まりっぱのパソコン画面だけなのです。

だから部屋暗い。

外は雨。

暗い。

目の前だけ眩しい。

目痛い。

画面に羽アリ多い。

畳が臭い。

雨と夜とパソコンのバーカ。

「……落ち着け私」

自暴自棄になってきた。深夜一時って結構センチな時間でもあるしき、人恋しい感じって言った方が合ってるかも。意味は全く違うけど。

とりあえずパソコンは大丈夫でしょう。

コンセント抜けば普通に改めて起動できるだろうし。多分だけどね。

チャットとかもどうでもよくなってきたし、寝ようかな。

いやでも、この雨には何となく惹かれるものだってある。「日常」とはちよつと違って、何となくロマンチックだ。……そう思うと、寝るのももつたいたなく思えてきた。

日本の雨がこれならスコールってやつはどんなに激しいのだろう。南国とかいいなあ。マンゴーとかいいなあ。ドリアンは……臭いよなあ。

と、いつも通りの妄想にふけて、そのうち結局眠気が迫ってきてやがった。

「寝よう」

席を立とうとした瞬間。

急に、部屋が真っ暗になった。部屋を照らす唯一の光が失われたのですよ。

プツン。とね。

パソコンの画面が消えました。黒いよ。……なんだか、急すぎて逆に違和感がある。機械が反応を起こすには何かしら原因が必要だと思っただけ。まあ、そこまで科学に強くない私には、その原因がなんなのかなんて知るよしもないんだけどさ。

……ちよつと気になって、画面をのぞく。

「お」

気のせいかな。  
ポツン。と。

真っ黒い画面の中に、白い光の輪が一つ。瞬き、広がった。例えるなら、ちょうど水溜まりに雨粒が落ちたような……そんな感じ。心霊というにはスリルが足りない。けど、暇を持って余した私の心を刺激するには、充分すぎる訳で。

また、ポツン。ポツポツと。

「……なにこれ、嘘、夢？」

誰に言うわけでもなく呟く。頭を叩くと痛いから、起きてる。夢じゃない。

ポツン、ポツン。ポツポツポツポポポポポポ。

「え、え、嘘、ちょ」

どしゃぶりの雨とともに激しくなる瞬き。私の持っている常識ではありえない光景を、私はただ茫然として見ているしかなかった。

数分が経過した。部屋が暗くて時計は見えない。

この部屋にある唯一の光といえば、パソコンの画面に映る光の輪だけのだから。

ポツポツポツ。瞬く輪。夢か現実か。……本当に分からなくなりそうだ。

「……なに、これ」

喋りながら、私は自分の声がふるえていることに気が付いた。恐怖なのか感動なのか分からないけど、とりあえず興奮している。ドクンドクンと脈打ちも早くなって、感情がミキサーにかけられたように落ち着かない。何というかべつとりしている。

輪は時間とともにやや収まりつつある。終わりかな？　と思いき

や、うつすらと……

少年が映った。

情けなくも腰を抜かす私。だって人が映ったんだよ？ その少年は突然、突拍子もないようなことを言い出した。

「……マジで映ってんのか、これ。……はは、はははははは」  
変質者かよ。

「はははは、はあ、はあ……。よし、これから僕は隕石を落とす。この隕石は一年後、地球……。それも日本に衝突するだろう。食い止めたのなら僕が送った招待状を見てみな。世界を救う方法が分かるからさ」

そしてスツと消えていった。

「……な、何じゃそりゃ」

隕石？ いや、そりゃあ実際にそんなことが出来たら凄いいけどさ。でも、ねえ。何だろ。何なんだろう。

ひよっとしたら夢の中のかな、これ……。  
なんてことを思っていたら案の定、起きたら朝だった。  
夢かな。やつぱり。

続く！

## 平穩とそーでもない事件・中

でーん。前回までのあらずじ！

雷が落ちて気付いたらパソコンになんか映ってたのであった。

そして朝っぱらからとんでもないけど若干心当たりのある  
ニュースが流れてきた。

隕石発見。このままだと地球に激突の可能性も？ だつてさ。

まさか昨夜に起きたことつて……。なんて思ってしまったが最後。  
なーんか妄想が頭の中を支配する。昨日のあれは夢なんだと完全  
には割り切れていない私。

とりあえず気になってパソコンの電源をつけて、とりあえず困っ  
てみた。

「うっわー……」

見慣れぬアイコンが一つ。ファイル名が「神ゲー（招待状）」の  
時点でデスクトップをかち割りたくなった。やり方が不細工過ぎる  
し訳が分かんねえええええええ。

いや、気にしたら負けだよな。とりあえずダブルクリック。そし  
てリリース。昨夜と同じ。まさか。

冷静に考えて見る。昨日の出来事が嘘だなんて判断には行きつか  
ない。

だって、それっぽく辻褄が合ってるんですよ？ しかも何かもう  
落ち着かないよ何これ。恋慕にも似たこの感情を誰か何とかしてく  
れ。

で、もっとよく考えましたよ私。とりあえず根拠らしい根拠は無  
いんだけど、隕石のこれからの進行ルートとあの少年には何らかの  
関わりがあるはず。

けど、そんなことを人に言ったら間違いなく私は異常者扱いされる。

他の人にとっては今日も昨日も明日も平和ないつもの毎日な訳だから、いくら私が隕石とか言っても私が社会から疎外されるだけなのは明白なのです。

本当は人に言いたくて仕方ないんだけどさ。しばらくは様子見ということにしよう。

正直なところ、私はとんでもなくワクワクしていた。何かが変わる。非凡なことが、きつとこれから起こる。

胸を躍らせながら玄関を飛び出した。徒歩で数十分。七色高校に到着。

ひっじょおおおおおおおおに。

期待外れだった。

ここまでの道で普段と変わったことは何もなし。

日常はそう簡単には変わりません。

明日世界が崩壊するとしても、世間はこのまま何も変わらないのかも……。

そう思うと、鳥肌が立った。

私の通う七色高校は、廃校になった小学校の校舎をリサイクルして作られたエコ高校だ。

陰気な雰囲気、そして七色という校名の影響もあってか、七不思議とかも結構ある。

非日常の扉が……とか思ったけど、結局一度も幽霊なんて見れなかった。

さーて教室に着いて一息。ここまで来ても、隕石のことが気になつて仕方が無い。

私は口が軽い。本当に絶対にばらしてはいけない秘密は守れるんだけど、昨夜のことや隕石の話は、私の中ではそこまでロックがかかっていなかったようです。

奇妙な話は奇妙な人へ。

学校に着いた後、すぐに上級生の教室に飛び込み、三年生の星野剣（つるぎと読む。もはや女子高生の名前ではないとも言いたいが剣さんは女子高生である）という先輩を屋上に呼んで話をした。

自称、正義のヒロインで、書類とかの偽造という訳の分からん趣味を持つこの人は、女子なのに女子にモテるといふ不思議な魅力の持ち主だ。

まあ、男にも十分モテるんだけどさ。とりあえず、うん。モテモテですよ。私とは中学からの馴染みである。

昨夜のことと隕石のことを一通り聞いた先輩の感想はこうだ。

「……そりゃあお前、隕石のニュースを偶然いち早くゲットした物好きニートがだな、善良な一般人をからかってやろうとウイルスを撒き散らしただけじゃねえかな」

そうきたか。この人、根は常識人なのである。

「……あー、でも、ありえなくはない……ですね」

いきなり画面に人が映るようなウイルスなんて見たことはないけど、納得する私。

「……でもほら、フリーズしたんですよ？ 止まった後に人が映ってたんですよ？」

「それも、壊れたように見せる演出だろ。ウイルスとかの」

「雷は？」

「偶然タイミングが良かったということだ。……俺もパソコンは詳しくねえから、そんなことが可能なのかわかんねえけどさ。すごいんだろ？ 今時の技術は」

……むう。私もパソコンについて、そこまで詳しいことは分から

ないから、先輩の言っていることが正しいのかは分からない。

分からないけど、納得してしまった。けど、えーと、ああああ！  
ちくしょおおおお！ 反論できなくなったああああ！

こんな私は社会不適合者でしょうか。どことなく孤独なような何かそんな感じ。

続く！

## 平穩とそーでもない事件・下

悔しいんで、教室に帰ってから同級生の桜木春風に同じことを話してみた。春風は私の相方とも呼べる存在で、ちよっとつり目の女の子だ。髪が長く、ポニーテールで空を飛んでも不思議ではない。

笑われた。

「わんぱく坊主かアンタは」

私は何かもう涙流しそうだった。

「隕石の進行ルートは君たち次第。……そんなもん、うちだったら頼まれても信用できん」

「う……現実的」

何なんじゃあああちくしよおおお！ と思いつき叫びたい。

みんな、昔は大きな夢を持っていたのにさ。高校にもなると進路とか学歴とかうるさいのなんのって。あの日の夕焼けの色を思い出そうよ。涙を流しながら見たあの夕陽をみんな忘れたのかよ！

「実際にあの場に居合わせてたら、絶対に信じるって！ きゃー画面に変なん出たって感じになるって。春風だつてわんぱく坊主状態になるって！」

「……まあ、確かに客観的な立場やから何とも言えんけど。じゃあアンタは今、冷静な状態で考えて、どうなん？」

「どうなんって……。今も冷静じゃないからなあ」

「アホか」

……へこむわあ。ストレートすぎるもん。まあ、それが春風の良いところでもあるけど。……真つすぐすぎて毒舌の域に入るのも考えものだ。

そしてそんな真つすぐ少女にケチヨンケチヨンにされた私。

高校生にもなつて、漫画やアニメのようなハチャメチャな世界に憧れるのは私だけなのだろうか。

趣味とかじゃなく、本気でこの世が変わることを願ってる。そんなアホな私の周りで隕石がどうのこうのとかパソコンの不思議な現象とかが起こった。ワクワクしない訳がない。

確かに私、わんぱく坊主並かもしれないけどさ。でも全部事実なんだよ。

どうして誰も信じてくれないんだよ……。

「何というか、隕石の存在は本当じゃん。ニュースであつたじゃん。激突の可能性って」

「他の番組では全く心配ないとか言いよつたで。あの番組、結構大げさやん。スキャンダルとかも」

「……つまり、私が一人で盛り上がったただけってこと？」

「せやろうな」

エセ関西弁の攻撃！ 効果は抜群だ！

「うっ、だ、断言……」

昔、夏祭りのくじ屋で欲しいものが当たらなかった時を思い出す。並べられたゲーム機は子供を釣る餌だと気付いたのは、それからずっと後のことだった。

まさか、またあの気持ちを味わうとは夢にも思ってたけどさ。

切ない。

「ちなみに、うち以外の誰かにその話したんか？」

「星野先輩にはしたけど。……他に言える人いないからなあ。友達少ないのさ私！」

中の下……いや、下の上辺りか。何故そついう位置にいるのか、自分でもよく分からない。成績も良いし、決して落ちこぼれではないはず。

……なのに、致命的な欠陥。友達が少ない。

リアルワールドは楽しくないですよ。だから隕石にこんなに興奮

してんのかな。

さて、星野先輩と春風、二人の言うとおり、特に世界に異変はなく、今日も平和でした。

二人に夢をぼっこぼこに壊されて、泣きながら夏祭りを後にする子供のような気持ちで教室を出て、二十分。現在私は小さな川沿いの田舎道を歩いている。

車一台が通れるかどうかくらいの細い道。

ここには基本的に人がおらず、割と大きめに鼻歌とか歌っても平気なので、私はこの道をウルトラお気に入り通学路と呼んだり呼ばなかったり。いや、呼ばないよ。

ただ問題は、それでもたまにいたる通行人とすれ違ったりした時、鼻歌聞かれてたかなーとか心配になること。まあ、それを差し引いたって、十分お釣りがくる。

もうなんか、この道を通る時が一番落ち着く。

いつもの風景。いつもの音。

サラサラと聞こえる川のせせらぎ。

名前も知らない虫の声。

雨は止んだけど、空を覆う雲の間からは燃えるものがゴゴゴゴゴと轟音を響かせて降ってくる。

……さりげなく超やばい。

だってゴゴゴゴゴ。なんかゴゴゴゴゴ。上を見てみると、もっとやばい。

「うわ……」

思わず声が出た。苦笑に近い。

だって何か降ってくるんだよ。燃えているものが。それもだいたい真上くらいから。

もしかしてUFO？とかいう期待より先に、このままじゃ川に落ちるけど大丈夫かななんて気楽な心配が頭をよぎった。

あ、じゃあ火が消えてちょうど良いのかも。

なんて考えていると、十秒もしないうちに飛来物は落ちた。川にとりあえず川の水で消火されて良かったんだけど、よく見ると人間だから困る。だって人間。

服装は黒い現代風の服装で、焦げているのかそうでもないのかこれが死体だったら驚くが、生きていたらもっと驚く。

だって生身だもん。

焼けてない時点でもんでもない。生きていたらホントに驚きの二乗だ。

そして彼は生きていた。覚悟はできてたから二乗ってほどでもなかったけど、腰を抜かすかと思った。

彼はひとまず普通に起きて、道まで登ってきて私に軽く会釈した。

……戸惑ってるぜええええ私。落ちつけ私。

落ちついて、落ちてきた人を冷静に見る。綺麗で中性的な顔立ち。男装美人かと思ったけど、多分男だ。

飛来してきた勇者は私に言った。

「須上結菜さんですね」

「え、あ、はい」

声で男だということがはっきりした。なぜ私の名前を知っているのかは置いていて、いや置いておけないよちょっと、

「結論から言っと。おそらくあなたは地球の運命を担っています」

「え、あ」

……え？

オソラクアナタハチキュウノウンメイヲニナツテイマス。

まあ、隕石とかパソコンとか隕石とか隕石とか。確かに心当たりがないわけではないが、まあ、危ない気もするわけで。

さあこのセリフに対して私は何をすればいいんだろう。

「……えっと、あなたは……誰？ ……ですか？」

ぱっと見た感じは、私と同じ年くらいの少年なのだけれども。

「ああ、申し遅れました。僕の名前はアルス。平たく言うと、宇宙人ってやつです」

同年年とか言う前に、地球人じゃなかったよ。

アルスくんは自分のことについて簡潔に説明してくれた。

「世の中のどんな星も、いつかは無くなります。星にも寿命がありますから。」

しかし、事故や事件など、何らかの理由で寿命より先に死んでしまう星が存在します。

事故の場合は仕方がないと言えますが、事件。それも外部の世界からの人物が関わる場合、見て見ぬふりもできません。

異世界間の警察を自負している僕らは、そういった事件の臭いを嗅ぎつけると、僕のような派遣社員を送り込むわけです」

まとめると、こうだ。

どこか危ないとこある？ あつこの世界の地球つてところ危ないんじゃない？ 行った方が良くない？ 了解。派遣向かわせます。

「ということでしょうか」

「平たく言えば、そうですね」

ふざけている風じゃない。

……なんてこった！ これこそ、私がずっと求めていた展開じゃ

ないか！

喜びと衝撃と困惑が入り混じる。  
未知との遭遇に、私はなんでか涙しそうになっていた。

リアルワールド崩壊！

ライトノベルの主人公みたいに未知を拒んだりはしないのさ！  
ようやく変化が訪れるんだ……！

続く！

## 異常者と異世界人・壱

チャンスとか、好機とか。

そんな言葉を聞く度に、根拠は無いけど嘘っぽいと思ってた。

でも、やっぱりあるんだよね、そういうの。

良くも悪くも、変わるチャンスは私の目の前に降ってきた訳で。

宝くじ一等賞より遙かにやばいよ。嬉しすぎて興奮し過ぎて気絶してもおかしくないかも。

とりあえず私は、空から降ってきたこの異世界人アルスクンを家に連れて帰ることにした。

勢いで即決。喜びは一種の麻薬です。正しい判断とか出来なくなるからね。

竹から出てきた女の子でも、川の上流から流れてくる桃でも持つて帰るのが日本人ですよ。異世界人だって……ねえ。持って帰りますとも。

たった今までこの星に存在しなかった彼には、当然だけど住居がなくてお金もない。だからってホームレスになってもらうのも気の毒だし。居候くらいはさせてあげたいじゃないですか。

……なんて慈悲心も無い訳ではないけど、本音を言うとき。彼とここで別れたら、このチャンスを逃してしまいそうで怖いんだよ。

居候させるかどうかは親の管轄だから、家に入れられるかはまだ分からないけどさ……。

「しっかし、さっきからどうも違和感あると思ってたけどさ。……何で私たち、会話が出来るの？」

「そりゃあ、僕が日本語を使ってるからですけど……」  
当然のように言う彼。

「なんで喋れるのよ」

「誤解されがちだけど、僕はここに不時着した訳じゃなくて、この星を救うためにこの文化を多少は勉強して来ているんだ。日本は侍や相撲取り、そしてガングロの国だってことも」

「いや違ってる」

侍もガングロも既に衰退した文化ですよ。何だか急に不安になってきた。

「……うちに居候する時、あんま変なこと言わないでね」

「頑張ります」

「あと敬語も禁止。使われるのは嫌いなんだ」

「あ……うん、分かった」

そういえば、彼を居候させる理由もちゃんと考えないといけない。記憶喪失のホームレス高校生でいいか。

家に着いて、母さんに事情を話す。

「記憶喪失のホームレス高校生？ うわ、大変。うちでよければ是非」

それでいいのか母さん。簡単すぎないか母さん。もう少しは考えるよ母さん。

我が家のセキュリティの甘さには呆れるばかりだが、今回に限っては感謝しなければ。

何たって地球の運命が左右されるからね。

「ところでお名前は？」  
げ。

アルスなんて言えない。違和感あるし、目立つし。

偽名……偽名……。平凡すぎると自分たちで記憶できないし、目立ちすぎるのも考えものだし……。

肝心な時に頭が回らない。こんな時に頭の中には坂本竜馬しか出てこなかったりする訳で。

「……坂本竜馬。だよ、竜馬くん」

「え、あ、僕は……あ……」

じーっとアルスくんを見つめる。アイコンタクトで彼も理解してくれたらしく、黙ってくれた。びくびくしているように見えたのはきつと気のせいだ。

「そう、分かったわ。よろしくね、坂本くん。自分の家だと思って、好きに使ってちょうだい」

そうして居候の許可は下りた。結構手の届かない望みを持っていた私だけど、意外にも居候が一人来ただけで退屈というものは消えてしまうものらしい。

清々しいよ。なんか。

「ところでどうして名前だけは憶えていたのかしら……」

「え、あ、えーと」

言葉に詰まるアルスくん。……近々、絶対にボロが出るよ……。

「一階がリビングと洗面所と……あと、母さんと父さんの部屋があるかな。二階に、私と兄貴の部屋。アルスくんは廊下に寝袋で寝る……と。そういう感じだね」

簡単に家の説明をしながら、家の中を案内してみる。

アルスくんには、こういう家の内装や雰囲気はなかなか新鮮だったらしい。目を輝かせながら、興奮気味に相槌をうっていた。

「すごいなあ……ユイナさん、これが地球の文化ですか」

「いやまあ……場所にも寄るけど。日本の二階建てはこんな感じね。あと敬語もさん付けもやめれ」

「あ、ごめん」

台所に興奮する彼のセンスが、私には全然分らない。しっかし流暢な日本語だよな。

「もう救いに来たというよりホームステイみたいになってるけど、やっぱり知らない場所の文化って面白いものだよ」

「……何しに来たのよ、君」

よく宇宙人に代表されるような火星のタコも、地球に来たらこんな風になるのだろうか。……それはそれで面白いけどさ。

「どうよ、この家。……まあ、満足行くかは分かんないけどさ」

「いえ、十分ですよ。外で寝るのを覚悟してたんで、屋根があるだけでも本当にありがたいです」

「はは。大げさだよ。ていうか敬語。同級生とかに敬語使われるのってさ……」

待てよ、何歳だ彼。

別世界の住人だから歳という概念があるかどうかすら分からないし、一年が三六五日ではないかもしれないし、成長の仕方とかが違えば当然歳というものは意味のない数字になってしまうんだけど、とりあえず聞いてみた。

「歳？ この国の数え方でいくと、十七かな」

ホントにタメだった。

「……なんか君、本当に宇宙人なの？ ほとんど人間と同じじゃん」

「あれ、言っただけじゃなかったっけ？ 僕は異世界から来たっただけで、生物学的な区分でいえば君達と同じ人間だよ？」

……マジでか。

地球人は宇宙人の一種という考え方に賛同したことなかった私だが、流石に考え変わるわ。

でも、全く別の場所で同じ種類の生物が発生するなんて有り得る

のかな……。

さて。外はもうすぐ夜になる頃。空は、隕石とかそんな不安を一  
切感じさせないような、キレイな紫色をしていた。

「そういえば、ユイナさん……じゃなくてユイナ。君って簡単に僕  
の存在を認めただけど、あれは地球の危機っていうものに関して、何  
か心当たりでもあったからなのかな。異世界の存在を知らない人に  
っては、僕のような存在は衝撃的なことじゃないか？」

アルスくんが言う。そーいや彼は遊びに来たわけじゃなかったん  
だった。

「……うん。一応、心当たりというか何というか」

私はパソコンを指さした。

「最近ね、私の周りが異常なんだ。……だから、君の登場もその異  
常の一つ。大袈裟には驚かないよ」

## 異常者と異世界人・貳

夜十時。雨もすっかり止んだのはいいけど、それはそれで静かな夜の到来な訳で寂しささえ感じられる。

さて、朝と同じように、パソコンの画面に出てきた「神ゲー（招待状）」というファイルをクリックすると、画面そのものが凍ったように動かなくなった。

1分経過……。二分。三分。……アルスくんが欠伸した。分かるよ。私も同じ気持ちさ！この五分の長さは耐え難い。

「……ユイナ、これって誤作動じゃあ……」  
我慢できなかったのか、アルスくんが呟く。

「いや。昨夜も今朝も同じだったんだ。しばらく待っていると、画面が急に暗くなってくんの。きっと……」

予想通りだ。画面が暗くなり、次第に円が瞬き始める。しばらくそのまま待っていると、少年が映った。

「うん、同じだ。ちよつと、始まり方が違うけど」

前の時は雷でパソコンが停止してから始まったけど、今回はプログラムによって私が半分意図的に開始した。つまり、受動と能動、テレビとビデオの違いがある。ま、それだけなんだけどさ。

画面の中の少年は、昨夜よりも饒舌に語り始めた。

「このプログラムを開いたということは、君もこのゲームに無条件で参加することになる。」

世界の運命を変えるかもしれない、神のゲームに。ちなみに無料ね。俺の場合、稼いでも意味無いし」

意味無いんだ……。

アルスくんは画面を睨み続けている。険しい目がちよつぴりセクシー。一人じゃないせいとか、私も昨夜よりリラックスしているみた

いだ。

「……彼が、地球の生死に関わると？」

「確信はないんだけどね。……隕石を落とす、だってさ」

「隕石、か……」

胡散臭いよね。

星野さんや春風の言っていたように、単なる隕石ニューズネタのいたずらだって考え方もできるし、どこまで信じればいいのか分からないといえばそうだ。

でも、そうだとすると、アルスくんが私の前に現れた理由がなくなる。

この少年が実際に隕石に関わっている証拠は確かにないけど、そうじゃないと、私の周りに起こっている出来事の一つ一つが合っていない。

まあ、この「神ゲー」とは全く無関係なところで、私が地球の生死と関わるんなら納得だけどさ。

つまり、アルスくんの登場が彼の行動を裏付けした。絶対にはまだ言えないけど、隕石は多分落ちる。画面の中の彼が言うことは、きつとデタラメじゃない。

……そういえば、画面の少年がさっき、「君たち」って言わなかったか？ 複数ですか？

「僕の名前はヤシヤ。これ偽名。勘違いされそうだけど、地球人だ。僕はひよんなことから、未来の力を手に入れてしまった。詳しくは語らないが、この力を使えば僕はこの世界の神になれる。」

それでさ、運が悪いことに……俺は人間が嫌いなんだよね。だから来年の今日、僕の仕掛けた隕石が、地球に衝突する。

怖いかな？ だったら阻止すればいい。これから始めるゲームでね。

腕っ節だけじゃない。人間としての知能、協調性……。社会の逆

風や誘惑に打ち勝つ、本当の強さを持つものがいるなら止めて見せるよ。言っておくがこれは余興だよ。まさか隕石一発で終わりなんていう呆気ない終わり方はしないよな」

……まあ、頭のネジでも外れたようにしか聞こえないけどね。

「どうよ、アルスくん。この人、隕石とホントに関わりあるかな」

「……そうだね。とりあえず、彼は元々この世界に生まれた人間みたいだね。地球最強なんていう、余所者から見れば規模が小さいことを誇っている」

異世界など視野に入れない。確かに、アルスくんよりもよほど規模が小さい。

「まあ、自称しちゃってるけどね。……でも……」

外部の世界から現れた人物が、星の生死に関わる場合に、自分のような派遣社員が使われる。

画面に映った少年ヤシャが元々地球に生まれた存在なら、アルスくんがここにいる理由ってないよね。あれ、裏付けとか全然出来てくね？ 色々繋がらなくなってきた。

「でも、未来の科学力とか超能力とか言っている時点で、かなり異世界とも絡んできてるんじゃない？ なんもんこの世界にはないし」

「……どうかな。断言はできない」

アルスくんが言った。

「なんでよ」

「一個ずつ言うけど、まず、超能力というのはどこの世界にもあるもので、この世界だって例外じゃないんだ。生物、特に、知能の発達したもの……まあ、代表的なのという人間が先天的に持って生まれる飛びぬけた才能で、食文化とか親の遺伝とか、そういった産まれる環境に左右されない。つまり、そこがどんな世界であろうと

も、とりあえず生物なら能力を得るチャンスがある。例外として、石が超能力を持つている場合なんかもあるけどね。だから、他の世界との関連があるかどうか、超能力だけでは判断できないんだ」

アルスくん本領発揮である。輝いてるぜ君。  
逆に私の理解力はダメダメだ。

「……えーと、まとめると、そこら辺ですれ違ったオッサンが超能力を使える可能性もあると？ 存在しないんじゃないかと、確認されていないだけだ」と

「そうだね」

あっさりと認めたアルスくん。マジでか。今度もし電車に乗ったら、隣の人をよく見よう。

というか、アルスくんはそんなことを普通にペラペラ喋っちゃってもいいんだろうか。

「で、未来の科学力って言うのは……これは、まだどこの世界にも存在しないんだ」

「え、でもなんかこう、この世界より発達した文明を持った世界だってあるんじゃないの？」

「そりゃあ、あるけど。でも時空を超える方法っていうのは、まだどこのどんな世界にも無いんだ。ここより進んだ世界の科学という意味なら、未来の科学なんて言い方は正しくない」

「タイムマシンは未だ出来ずか」  
「一方的に未来へ行くモノなら、もうすぐどこかの世界で完成しそ  
うなんだけどね」

文化や物質を過去に持ち帰る術はない、ということか。

……えーつとーんと……まあ、要するに、

「総合して言うと、このヤシャって人は、地球滅亡とか君がここに  
いることとは無関係かもしれないってこと？」

「まだ分からないけどね」

なるほど。……と、ここまで来て、ゲームの説明を聞き流しまくっていることに気がついた。

「……以上で、説明は終了。一年後、世界がどうなっているのか、楽しみにしとくよ。……じゃあ、またいつか」

すいませーん最初と最後以外、全部聞き逃したんですけど。

まあでも、録画だから、また聞け……なかった。やり方が分からない。

普段使っているような便利ソフトならともかく、「神ゲー」のプログラムには説明もついていないし、対応のしようがない。不便。ふざけんなヤシャとかいうアホ。

「ただいまー」

兄貴が帰ってきた。

さて。アルスクんのことをどうやって説明しようか。

「兄貴だったら多分、普通におかえりーとか言ったら気付かれずに済むと思うよ」

説明はいらぬ。兄貴なら分かってくれる！

「そ、それはさすがにないと思うけど」

「私を信じる！」

階段を上る音。さて、どうなるだろ。

「おかえり、兄貴」

「おっ」

「お兄さん、お帰り」

「オマエ誰ええ!？」

分かってくれませんでした。

## 高校生の戦場

母さんたちとは違って、兄貴だけはアルスクんの居候に反対した。ま、なんとか説得したけど。

んで、目覚めの悪い朝である。

警報でも出ていれば、今朝はパソコンやり放題だったんですがね。中途半端に強い雨って一番困る。

「ふざけんなあああああああああああああ！」

まあいいよ。昨日は良いことがあってごきげんだし。異世界人と出会っちゃった訳だからね。奇声も飛び出しますよ。だから雨くらい許す！ という訳で仕方なく、私は今日もこの通学路をてくてくと歩いているわけです。

昨夜から始めた「神ゲー」は、言ってみるとスタンダードなロールプレイングゲームだった。

それぞれのプレイヤーが自分のキャラクターを操作して、モンスターを倒すというありふれたもの。

ネットゲームの特色として、他のプレイヤーとの協力や駆け引きなんかがあるのも意外とありきたりでさ。とても現代に通用するような特徴とは言い難いのであります。

隕石がどうだこうだっていうのも、プレイヤーを増やすためのハッタリかもなーなんてね。

そう思われても仕方がないよ主催者さん。……実際そうなのかなーとか思うと、何となく切ないけどね。

さて、喜ぶべきか嘆くべきか、今日も通り魔や何かに襲われずに、無事に七色高に着いた。何も変わらない通学路とか、何も変わらない教室にはうんざりする。

あんなゲームまで出回って、この普通さってなんで？ もっと、漫画やアニメみたいな展開になったりはしないのかな……。

というか、そうなれよ。

……ならないよな……。

「よ、ユイナ。昨日の隕石の話、結局どうなったんや」

エセ関西弁で、いや私も本物知らんからなんとも言えないが多分エセ関西弁で、春風が興味なさげに聞いてきた。もしかして、内心は気になってんじゃないのかこいつ。

「……えっと、あんまり言わない方がいいかもしれないんだけどさ……」

と言いつつ全てを話す私。己の口の軽さに呆れるってのも悲しいもんだ。自業自得じゃねーかなんて突っ込みはヤボですよ。弱者にしか分からない心境だってあるもんなのさ。

一通り話し終えた私。やや呆れた視線が痛い。

「……ホント、くだらんや太話もええ加減にせんと、いずれ頭腐るで」

どんだけ冷めてんだよーこいつの頭。そして直球である。結構、心にダメージ。

世間的に、まともで正しいのは春風の方であって、私はバカルートを進み中だつてことがはつきりと示されるこの尖った感覚は、私には効果抜群だ！ うわーん。

アルスくんのことネットの話も本当なのに、それを証明する手段がない。さあ困った。困ってちゃあ見る見るうちに弱者だ。

だったら、現実的。そんな彼女の生き方の方が生きやすい。けどさ、それって楽しいの？ 生きやすければそれで幸せなのかよ。違うでしょ？ そんなんつまらないじゃん。

夢を見ていたい。ありえないことを信じたいんだよ。昨日、彼は上空から、燃えながら現れたんだ。異星人や超能力者はいるんだよ。

なーんて言ったところで、私が頭おかしい人扱いされるだけなんだよね。

しばらく春風と言い合いをして、もうそろそろ先生が来るなんて思った瞬間、扉から先生が現れた。

ちよつとは未来予知に自信がっていたが、まあこれが明後日にはほぼ完ぺきに忘れきるレベルの問題だと思つと無意味な収穫だ。

「よし出席とるぞー。赤井」

「休みー」

「何だと。まあいいか。井野」

「はいー」

クラス全員の名前を呼び終わると、先生は唐突に、

「転校生紹介するぞー」

などと言いだした。

「まあ中途半端な時に来るもんやなー」

春風はどーでもよさそうに呟いた。

「あー、確かにね」

なーんて言いながら、内心、私の場合は正直すぐく心を弾ませている訳ですが。新たな出会いってやつ。ここから始まるドラマだつてある訳じゃん。

先生が手招きすると、廊下から転校生と思しき人物が現れた。や、他に候補はいないけどさ。

ぱつと見た感じは、おとなしそうな女の子って感じ。不機嫌そうな目つきとかは、いかにも誤解を呼びそうだ。春風や私に近い人間なのかもしれない。そんな転校生さんである。

ミステリアスキューティ威圧感。……いわゆるクーデレ？ いやデレてねえけど。

「……転校生の、光村、です」

殺気を含んだような声。タダ者ではなさそうだ。最近の私の周り

は一体どうなってるんだろう。そのうち私、死ぬんじゃないだろうか。「じゃあ、光村。……は、そうだな。あの空いた席に座れ。そろそろ席替えもしないといけんな」

マジカマジカマジカマジカマジカマジカマジカマジカマジカ。

空いた席は私の隣だったりする訳で。右には春風、左には転校生さんというこのフォーメーションはなかなか厄介な気が。

……なんて思いつつ、本音を言えばワクワクしているんだけどさ。

朝の授業が終わる。左に座った転校生の光村さんとは、まだまともにも話していない。

だって、なんか話しかけづらい雰囲気をかもし出してるんだもん。緊張しているのか嫌われているのか分からないけど、なんかふとした瞬間睨まれたりするし。

人見知り、直さなきゃいけないんだけどねえ。

「……ああ、もう弁当の時間か」

時間が経つのが早い。昼食はこう、クラスの皆が群れる時間帯ですよ。近所ってことで光村さんも誘おうかと思っただけけど、いなかった。

席を移動するってことは、もう友達ができたってことだろうか。

……いやいや、ずっと私の隣にいて、友達作るなんて不可能じゃね？

「……ま、いつか。春風、どうする？」

「おう、食おうや」

教室には、複数の生徒……特に女子で構成されたグループが幾つかある。

何故か、私と春風はそういった群れには属していなかった。きつ

かけが無かったというのもあるけどさ、馴染めないってのもある。例えばこんな風に、

「須上さん、今日、こっちで食べない？」

あえて私のみを誘ったり、

「あー、いや、今日は遠慮しとく」

「……そう」

断るとなるとな〜く棘のあるような無いような態度を一瞬だけ覗かせたり。そういったある種の縄張り意識みたいなもの。それが何か性に合っていないというか……。と言いつつ真っ向から齒向かう私って何なんだろうね。何だかもう二人ぼっちですよ。

週に一度は、一番大きなグループのリーダー格、瀬尾さんに声をかけられる。春風と二人の時に、わざわざ私だけに対してだ。

ルックスも良く成績優秀でついでに毒舌な面がある春風は、男子からはモテるが、女子から嫉妬や敵意を受けやすい傾向にあった。けど、小学生のような露骨ないじめをするほど馬鹿ではない彼女らは、至って自然にターゲットが孤立するよう、日々計画を進めていくのであった。完。

いや終わらんが。

「……行きたいんやったら瀬尾らのとこに行ってもええねんで。うち別一人でかまへんし」

なーんて言う春風。全く強がりもいいところである。

瀬尾かりん。金持ちで、ついでに何かよく分からんけどカリスマ性みたいなものも持ち合わせる才女。私とは結構古い付き合いだけど、大体常に友達の友達的な関係だからあまり仲良くはない。……悪い訳でもないんだけどさ。

「私が本当に瀬尾さんと言ったら泣いて悲しむくせにさ」

「ア、アホ言うな」

若干顔を赤くして反論する春風は、ちょっと必死で可愛かった。

「アホじゃないよ。孤独ってそういうもんでしょうが。……っーか、そっぴや光村さんって瀬尾さん達と一緒にじゃないね」

「ほんまやな。……席どころか、教室まで動いたんかな」  
なんてアクティブ。……な性格には見えなかったけど。トイレで  
ご飯とか食べていたらどうしよう。隣の席の人間として、何となく  
責任を感じてしまう私であった。

弱肉強食。瀬尾さんを見ると、何となくそんな言葉が浮かん  
だ。

ぱっとしない私らは、弱肉なんだろうか……。何考えてんだろ私。

昼休みが過ぎると、光村さんはいつの間にか私の隣に戻っていた。  
授業。ホームルーム。終了。放課後突入。何事もないですよ、も  
う。結構、人生ってすぐ終わるんだろっね。

## くまさん

なーんか春風も光村さんも一人でとことこ帰ってしまい、置いていかれた寂しい可哀相な私。瀬尾の奴もこういう時には全然誘ってくれんのですよ。

何となく腹が立って、珍しく遠回りになる町の道を通っていると兄貴と星野先輩に会った。

「あれ、あ、先輩、ども。兄貴、何してんの？」

「別に。つか、横断歩道の真ん中で立ち止まるなって」

うお。兄貴の指摘で初めて気がつく私。どうも、すぐに周りが見えなくなる癖は直さないといけないな……。

「で、何で二人が？ デート？」

「そう見えるか？」

見えない。全く見えない。遠めに見ると同性にすら見えてしまう。そして二人とも目に覇気が全くない。ホント、似たもの同士である。色気もクソもないけどさ。

星野先輩は溜息まじりに口を開いた。つか、溜息は口を開かないと出来ない訳ですが。

「……えつとな、探し物……というか、人を探してたんだ。こいつに手伝ってもらってな。……見つからなかったけど」

そう言っつて、ちよつと残念そうに目を下に向けた。

「はあ。人探してつて、誰を探してたんですか？」

「言えるかアホ。俺達星野家の天敵なんだよ！ 名前なんか出したら一家全員が殺されちまう」

「マジですか？」

「……半分冗談だよ。怖い奴を探していたのは本当だけど。で、そっちこそこんなところで何やってやがる」

「え？ 深い意味はないですけど。……こう、都会のロマンを感じようっつ」

「そうか」

念を押しておくが、星野先輩は女だ。横顔とか見るとスゲーかっこいいから、たまに自分で思い出さないとまずい。惚れそう。というかもう女でもいいから何かもう何だろ。何というか星野先輩のペツトになりたい。チワワになって甘えまくりたい。ポエムの才能あるかもな私。

「ま、立ち止まってんのも何だし、帰んね？」

兄貴が言う。見ると、私らは見事に通行人の邪魔になっていた。どうも、兄貴が一番常識的みたいだ。

街から歩いて数十分。いつもの川沿いの道。昨日のように何か降ってくるという訳でもなく平和だ。人とか間違っても降ってこねーだろうな。

「にしても何か、珍しいですよね……この三人で帰るの」

「ホントにな」

星野先輩が肩をすくめる。普段よりニヤつき顔だから、機嫌はいみただけだね。

「……そっぴやユイナ、お前さ、居候を連れ込んだらしいじゃん。

話聞かせてくれよ」

「え、あ、はい。良いですけど。……兄貴、広めた訳？」

「まさか。こいつにしか言ってるねえよ。笑い話で済む話ならともかく、色々と問題があることだし」

ホントは居候がどうだとか言ってる場合じゃないんだけどね。地球が危ないんですよ。

という事情も知らない星野先輩が、完全に面白がって聞いてくる。「ほら、記憶喪失とか色々聞いたからさ。どう巡り合って、どうなってるってどうなったのか」

「……多分、言ったら私が社会的に死を迎えますよ」  
そんなことを言いつつ、緩やかなカーブを進み……。

……さて、ここで三人同時に絶句である。

なぜかって、その曲がり角を曲がると、目の前にホッキョクグマがいたからだ。

ホッキョクグマというか、白い熊。唐突にも程がある。

私は思わず言った。

「すげー」

「……いや、確かにすごいけど……普通、もうちょっと驚くだろ。怖がる感じで」

うむ。兄貴の言うとおりである。ここ最近、自分の周りに色んな事があった私は、未知への恐怖とかが薄れてしまっているんだろう。……あれ、それってやばくない？ 恐怖心がなくなるってことは危険を回避出来ないってことですよ。つまり、どんどん巻き込まれ……。

あれ、それって私の理想じゃん。

ともかく目の前にホッキョクグマ。二人とも、どうすればいいのか迷っている。むしろ感心している私の反応が異常である。

「……おい瑞樹、どうすんだ。熊だぜ熊。死んだふり？ 死んだふりすんのかな。死んだふりだよな。死んだふり」

「知るか！ と、とりあえず警察呼ぶから。落ちつけ俺ら」

「保健所じゃないのか」

「ああもう良いんだよ大人に任せてさっさと帰れば」

兄貴は早速携帯を手に取り、一一〇に電話をかけようとして、

「させマセン！」

くまさんに携帯を奪い取られた。

「あー！ 俺の携帯ー！」

さすがの私もこれは普通に驚いた。言葉喋ったよ。くまさんが、しかもカタカナ敬語。

ホントにくまなのだろうか。

……いや、うん。何というか、もったいぶったけど絶対違いますよね。

## くまさん2

「……ちよ、ちよ」

目の前のくまさんの行動に呆気にとられる私、と兄貴と先輩。恐れとかは全くないんだけども、とりあえず驚愕したというか。

「ハハハハハ。オレは貴様らを待ち構えていたのダ！ お前たちはいずれ我々の計画の障害になる存在。危険な芽はすぐにでもつまないとイケません！ ははは死ねええ工！」

「ちよ、何こいつ、喋ってるよ！ ど、どうしよ。どうすればいいの？」

そして敬語なのか乱暴口調なのかはつきりしてほしい。

「どうすればいいの？ じゃねーよ。写真撮るなって。怒らすとなんかやばそうだから」

兄貴が呆れたように言う。緊張なんか、好奇心とか探究心に簡単に負けるもんでしようがよ。

そして熊さん、何の変哲もないタツクルときた。さすがにちよつとインパクトに欠けるよそれ。

でも図体がでかいので、それはそれで強かったりするのであった。

「うおつと」

まあ、遅いから簡単に避けられるけどね。先輩と兄貴はいつまでも驚き顔で、どうしようか迷いながら動いている風だった。

「……おい、ユイナ！ どういうことだ。俺には理解できんのだが」「え、いや、知らないよ！ あ、いや、多分、アルス……じゃなくて何だっけ。そう、坂本くんが関わってることだと思っ！」

「何だとおい、あいつの仕業か！」

「じゃなくて……ちよ、くまさんタンマ、くまさんやめろー。つかこれそのうち呼ばなくても警察来そうだよね」

聞く耳持たず。くまさんは容赦なくタツクルを繰り返す。

「わはははは。はははくらえええ！ はあ、はあ……」

ばてちゃった。正直、全然怖くないんですけど。可愛くさえ見え  
てきた。

「うおお、こつなつたら本気デス！ 行きますヨ、うおおおおり  
やあああ！ タイラント北極タツクルうう！」

どん。と音がした。重たい一撃を食らったような、鈍い肉の音。

「ほ、星野先輩！」

ばた。

かくしてくまさん、凝った名前の技を出さず仕舞で倒れてしまっ  
た。

ちゃっかり後ろに回っていた星野さんが、ヤクザキックでくまさ  
んを倒したのだ。

「うっわー、痛そう。ね、痛いよね。ちょ、喋るくまさんシャレに  
ならない感じですけど先輩」

「きよ、キョーレツ……」

ヤクザキック一撃で倒れるくまってどうなんだろ。まあ、ともか  
く助かったっちゃ助かったのか。

せっかくの喋るくまだったので、ちょっともったいない気もする  
が。

「……あー、動物愛護団体から苦情とか来たらまずいな。ユイナ、  
今のは無かったことにしてくれよ。あ、瑞樹、警察呼んじゃった？」

「携帯奪われたのに、どうやって連絡するんだ」

「そうか。助かった。そこの野良犬でもまずいのに、ホツキョク  
グマだもんな。しかも言語能力つき」

念をおすが、星野先輩は女である。かけえなこの人。ホント。

だが、くまさんもそれでやられるほどヤワじゃなかった。

「……ははは。まさか、オレが不意を突かれるとは驚きデス。だが

しかし、甘い！ 真の姿を見せてヤル！」

「し、真の姿だと!？」

ということとはということとは……！

「喋るくまは嘘っぱちだったのか!?!?!」

サンタがいないと悟った時の静かな気分を思い出す。

子供にとって、あのお爺さんは実は幻想の産物なのだと思った時のシヨックは意外と大したことではない。

ただ、いなかったのだと。それだけだ。確かに少し騙された気分だが、子供はそれで盛大に傷つくほどヤワではないのさ。ヤワではないです。

ただ、裏切られたのだと。時間をかけて苦味を消化していくのですよ。

何の話をしてんだ私は。

「真の姿？ おい瑞樹うおわ、眩し」

突然、光が世界を包む。

いやまあ、包まれていたのは世界ではなく、くまさんと私たちの視界だけです。光が収まったので目を開いてみると……。

おめでとう！ くまさんは にんげんに しんか した！

進化じゃなくてむしろこっちが本来なのだろうけどね。

「……いやいや、ちょっと待て！ 変身ってことじゃん！ ちょ、え、嘘、マジで」

なんじゃこの感動は。変身ということは、変身ヒーローだつてどこかにいるのかも。

じゃあ、悪の組織も実在するのかな。ワクワク。じゃねえよ私。

さてその元白クマさん、ぱつと見は、帽子で顔を隠したトレンチコートの紳士。

しかし、顔を上げると、そこには異常に鼻の長い細目のお兄さん……おじさんに近い……がいますですよ。

その長鼻さんが全くホツキョクグマと全く関係のない見た目だということも驚きなだけどさ。

不思議な現象に慣れたとはいえ、ここまで理科の授業で学んだ内容を崩されると、そりゃあね……。あれ？ とはなるよ。

「……何だその鼻は」

そして容赦ない兄貴の言葉攻め！

「うるサイ！ コンプレックスデス！」

「兄貴、あんまり刺激しない方が……」

くまさん、あ、いや、長鼻はまたもタツクルしてきた。身軽になったからかな、さつきよりも格段に素早くなっている。

芸がないなーとも思ふなあ。普通に喧嘩した方が強そうだよなー。そして鼻のことを言ったせい、兄貴が攻められるのであった。

「……いい加減、読めてきたけどな」

長鼻さんのタツクルを受け流しながら、兄貴は何か技らしきもので長鼻さんを倒した。

あまりに単調な攻撃。素人でも、避けて反撃くらいなら十分可能だよ。

けどまあ、これは可哀相だ。

だって、兄貴と星野先輩のリンチだもん。いや、そんな大層なものじゃないけどさ。

見ないことにするか。

しかし、一対一とかいうフェア精神はこの人たちにはないのだからかね。

長鼻さんはふらつきながらもどうにか立ちあがり、涙目で語り始めた。

「……クク……。お前たちが普通の人間だから、こうして手加減してあげているのデスヨ？」

言い訳にしか聞こえん。

「しかし……いいでシヨウ！ サイキックを使ってあげます！」

丁寧なんだかうっとおしいのか分からない長鼻が、私に向かって手をかざす。

「……イキマス」

「……え、イキマスって？ ちょ、まずいつて、ちょ」

いくつて何があああああ！？

ふわり。

踏んでいた、常にあるはずの地面の感触が急に無くなる。ぎゃああ落ちるうっうっ！ うっ？

いや、逆だ。浮いてんだこれ。

「……ややややや、いやあああ！ すごいえええ！」

「すごいえええ！ じゃねーよ！ もうちょい危機感持てお前！」

上空に、そう、空に向かって、落ちている。重力の向きが変わったような感じ。やばい。ジェットコースターみたいに世界がグルングルン回って……。

「わ、わ、わ、ちょ、待あああ！」  
そのまま、川へ投げられたらしい。

バツシヤンと飛び散る水の音。体に轟く痛み。……さすがにへらへらできないや。打ちどころ次第では命が危ないって。シヤレじなく。

……ああ、そうか。最初から命狙われてるんだっけか。

「……これ、きっとサイコキネシスってやつだね」

「ハハハハハ。その通りデス。スゴイのデス。着地際にわざと減速してあげたのデスヨ？ しかし、次は違いマス。行きますヨ……」

さすがにダメージ。痛いわ濡れたわ何か長鼻だわで、超やばい状況ではある。

ただ、もうあと少しで死が見えるってとこまできてるのに、私は全然怖くないんだな、これが。

……むしろ、久しく忘れていたこの緊張感……！ 高揚した私のこの胸というか心臓らへんの暴走は、

ベシ。

兄貴の不意打ちによって、呆気なく終わってしまったのであった。

「兄貴いいい！」

「え」

「せつかく……せつかく……」

私の人生が、物語のようにカラフルになりかけていたのに、さ。

「一応、警察にでも行っとく?」

ということ、交番に長鼻さんを連れて行くことと思っただけど、

「スキありいいい!」

という具合に逃げられた。

トレンチコートの背中部分には小さく、「サイキック団」と書かれてあった。

こうして超常的な現象は、私だけでなく、私の周りの人々をも巻き込んでいくのであった。

何か、大した盛り上がりも見せず、随分と静かにさ。

## アルス

「……サイキック団ですって」

胡散臭すぎるけどさ、あの長鼻を見た後じゃあ、この二人も納得でしょう。もつとも、私はアルスくんが現れた時から、何かを疑うとかいう発想が無くなってしまっているのだが。

すっかり平和になった川沿い。相変わらず人がいない。

私の言葉は時と風によって無かったことにされた。というかむしろ、二人の関心は別のことに向かっていたんだ。

昨日、星野先輩に意味不明な不思議体験を語り、家に得体の知れない少年を連れ帰った私。

普通なら信じない。普通の、常識の中にいる人ならね。けど二人とも、たった今、普通ではない経験をしてしまった。もう私と同類だ。

「……ね。分かった？ 今、世界は変わりつつある。それが、前からこうだったのかもしれないけどさ。……私、変なの？」

「いや。……俺も含めて、みんな似たようなもんだろうよ」

星野先輩が言った。感情をなくしたような、低くて沈むような声だった。

兄貴は私に詰め寄り、言った。

「どういうことだ」

声は落ち着いているけど、怒っている。

「ユイナ、お前さつき、居候と関係があるって言ったけど、何か危険なことに首を突っ込んでんじゃないだろうな」

「……危険じゃないけど」

「だったら今の長鼻をどう説明するんだよ。俺らがいなかったらお前、死んでたんだぞ」

「それは……。でも……」

「そもそも、居候の件だってお前……」

「瑞樹、落ちつけ」

星野先輩が、私をかばうように私と兄貴の間に入ってくれた。何だか本物の姉さんみたいだな。

「お前に落ちつけとか言われたくねーっての」

「うるせな。まずは話を聞かないと分かんねえだろうが。な、ユイナ。昨日の隕石の話、もう一回話してみよ。居候のこともさ」

話すしかなさそうだな。……実際、話したくてうずうずしていた訳ですが。

「……分かりました」

私は、ここ最近あった不思議な現象を全て話した。

パソコンが雷で止まったこと、画面にヤシヤと名乗る何者かが笑われ、ネットゲームに参加させられてしまったこと、そのゲームで隕石の軌道を変える力が手に入ること。そして、アルスクンのこと。私が、地球の運命を握っている可能性もあるということ。

二人とも真剣に聞いてくれた。そのことが、少し嬉しかった。

「……やれやれ。俺らの知らないところで、地球ラストイヤーが始まってたってわけか」

星野先輩の感覚はよく分からん。

「まあ……ラストイヤーですね」

「……悪かったな。昨日、疑って」

先輩は反省レベル四割程度で謝り、分かれ道で私らとは別方向へ帰って行った。

理論派なのに感情的な兄貴と、感覚派なのに冷静な星野先輩。似ているのか真反対なのか、よく分からない。

「……ごめんね、兄貴。受験の忙しい時に、こんななっちゃって」  
「別に。……それより問題なのは……居候の方だろ」

兄貴はそれだけ呟くと、呆れたように頭を抱えて見せた。

無事に帰宅し、ほっとしたのもつかの間。兄貴は早速、アルスくんを捕まえた。

「ちょ、兄貴、いきなりかい」

「当たり前だろ」

目が点とはこのことだろうね。困ったアルスくん。

「状況が読めないのですが」

そりゃそうだ。

兄貴は自分の部屋に私らを集め、ホッキョクグマが「おひよひよひよひよ」と言いながら（実際には言っていない）長鼻になっていたいけな少女（私）を川に放り込んだあげく、倒れつつ背中の子キック団というマークを見せてそのまま道に捨てられた（捨てたのは私らである）という話をアルスくんに聞かせた。

「という訳なんだが……どうということだ、これは」

「どういって……超能力だとは思いますが」

「それは分かってる。それじゃなくて……ああ、もういい。まず、最初から話を聞こうじゃないか」

というので、アルスくんは超能力の概要から、私との出会い、地球の危機、ネットゲーム、異世界の存在、坂本が偽名だということまでを全て話した。

さつき私が一通り言わなかったっけ？ まあ、私の口からだけじゃあ信じられなかったのかもしれないけど。

全てを聞き終えた兄貴は、難しい顔をしながら、ちょっと意地悪な質問をした。

「証拠はあるのか？」

ドラマの憎たらしい弁護士を思い出して虫唾が走った。

「あ、兄貴、あんまりいじめないであげてよ……」

「お前が簡単に人を信じすぎなんだっての」

……確かに、一切疑おうなんて思わなかったし、兄貴の言うことの方が正しいんだけどさ。

まあ、証拠があれば解決なんだ。さあ、アルスくん！

「……証拠……ですか……」

ひるんじやったアルスくん。無いのかな。というか、そもそも異世界から来た証拠って、あんまり思い付かないな。

もし私が三十年前にタイムスリップしたとして、三十年前の人間に今の携帯電話を見せても、自分が三十年後の人間だなんて信じてもらえるかは分からない。

「証拠が無いなら出て行けよ」

「兄貴、いい加減に……」

「分かりました」

兄妹が今にも取っ組み合いの喧嘩を起こす寸前に、アルスくんは立ち上がった。

「証拠はありません。それで出ていけって言うのなら、出ていきま  
す」

「ちょ、地球はどうする訳!？」

「解決の糸口は見つかったんだし、後は任せるよ。……まあ、この町には滞在するし、困ったら連絡してくれれば……」

そしてそのまま出て行ってしまった。

「……え、ちょ、マジで!？ 兄貴、何してくれてんのよ!」

「知らねえよ。元々胡散臭いやつだったろ？ 百歩譲って超能力がありだとしても、異世界なんて俺は信じられない。……これで良いんだよ」

「なんで断言できるの! 兄貴こそ、異世界が存在しない証拠とかあんのかよ!」

いてもたってもいられず、私は部屋を飛び出した。

「おいユイナ! どこ行く気だ!」

「アルスくん探して、連れ戻してくるだけ!」

あのヤロウ、地球を救いに来たんだろうが! 絶対にホームレスなんかにはさせないんだから!

## アルス2

午後七時。外はもう暗かった。さっき、ホツキヨクグマと戦ったいつもの川沿いに来てみた。アルスくんとの出会いの場所だったし、ここにいるような気がしたんだけど。いない。

アルスくんどころか、人も、車もない。たまにすれ違う車のライトが眩しい。車とすれ違ってんのかライトとすれ違ってるとのか分からない。

そしてそんなことはどうでもいいのだ。探さないと……。そういえば、先輩も誰かを探していたっけ。

そんなことを考えていると、急にめまいがした。え、ちょ、あ……。

「……………」

どうしたんだ私。本気で頭が痛い。道端に座り込む。意識がふわふわしている。脳の片方で、誰かと話しているような……。

誰だろう。

多分、知らない人だ。

気持ち悪い。

頭が。

体がだるい。

何たるこれ。

自分が起きているのかさえ分からなくなってしまった。

「……………お前が須上結菜か」

白クマさんの繋がりだろうか。白髪の若者が見える。

手には鬼の顔をしたお面。誰なのか聞こうとしても、上手く喋ることができない。何だこれ。白クマの時とはプレッシャーがま

るで違う。

白クマに狙われたことが可愛い幽霊に会った程度の危機だとしたら、これは……、

侍の生霊を前に、金縛りに遭っているようなものだ。

そのうちに体が浮き始めて、頭は痺れたみたいに全然回らなくて、ふわふわしてきて……。

何？ 死ぬの？ 死ぬのかもしれない。走馬灯は流れない。流すほど大した記憶を持っていないということかもしれない。

思えば本当に退屈な人生だった。

高校生で人生なんて言葉は使うべきじゃないのかもしれないけど、それでも……それにしたって空っぽで。本当に何もなくて、同い年くらいの有名人がテレビに出る度に妬んで、同じクラスの誰かが何かの賞をとったら羨んで、自分には何もなくて、友達もいなくて……。

星野さんと兄貴しかいない。あの二人に生かされている。あの二人だけが私の救いで、あの二人がもしいなくなったら……。どうなるんだろう。

春風と一緒に暗い日々をただ過ごしていくのかな。それは嫌だ。

「……須上さん」

どこか遠いところで、誰かが言った。さっきの白髪とはまた別の声。

「……須上さん」

聞き覚えのある女の声。その声はだんだんと近くなっていき、

「須上さん！」

耳元で、車のクラクションみたいに響いた。

「はいい！？ ……あ、おはよー ……あれ？ 君……」

転校生の光村さんが、倒れた私を覗き込んでいた。

「酔っぱらったのか？ うなされていたが」

「……いや、あの、気分が悪くて……、って、あれ」

治っていた。気分爽快である。何だったんだろう。今は……。

しかし、光村さんもうしたのだろう。こんな真つ暗な時に。

……真つ暗？ 自分の思考に慌てて待ったをかける。時計を見ると、時刻は既に九時を回っていた。倒れる前は七時くらいだったから……、

「うお！ まさか。二時間も眠っちゃったのか私」

「ああ。場所が場所だったんで起こしたが。おせつかいだったか？」

「あ、いや……」

むしろありがたすぎて惚れちゃうぜ！ 冗談だぜ！ いや、感謝はしているけどさ。

「あの、光村さんは何してんの」

「人探し」

「人探し？」

星野さんも同じこと言ってたな……。

「……心配いらぬ。貴女とは別件だから。サイキック団とか、そ

ういう世界とは何も関係がない」

それだけ言うと、光村さんは去って行った。

「え、ちょ、待って！ 何でそれを知ってんの？」

私の言葉は夜の静けさに飲まれた。……まるで、倒れてからの二時間、全てがキツネか何かの悪戯だったんじゃないかって、そんな気さえしてきた。

「……んなことはどうでもいいんだった」

今は、アルスくんを探さないと。

時間も時間なので、携帯に心配メールでも来てないか見ると、一通だけ届いていた。「はよ帰れ」だって。大して心配してないな。ちよつと残念だったりもする。しばらく歩いていると、家の近くの公園のブランコにアルスくんがいた。

「あ……ユイナ……さん」

「さん付けはしないで」

「……ごめん」

私は隣に座った。何となく、カップルみたいなことをしてみたい気分だったんだ。

「……兄貴の言ったこと、気にしなくてもいいんだよ？」

「事実ですから」

「それはそうだけど……」

「いいんだ。元々、こうなる予定だったし」

ホントにそれでいいんだろうか。私は兄貴の考え方が分からなかった。彼が私を騙す理由なんて何もないじゃん。金目当てだったらもつと金持ち狙うだろうし、エロ目当てだったら……確かに居候はきわどいかもしれないけど、それならわざわざ私を選んだりしない

だろうし……。

「ああもうバカ兄貴！」

「……あんまりお兄さんを買めないであげてくれないかな。ユイナ  
のことが心配なんだよ、あの人は」

「まさか。固い頭で固い結論だただけよ。そのくせ感情的なんだ  
からさ」

「……兄って不器用なもんだよ。僕にも妹がいるから、あの人の気  
持ちはよく分かる。……妹の心配するのって、本当に照れくさいん  
だ。だから素直に言えない。それだけだよ」

だからホームレスになる、と言って遠い目をするアルスくん。い  
やダメだって。主に衛生面で。

「……兄貴は私が説得する。君に万が一のことがあったら、誰が地  
球を救うのよ」

「……でも」

「でもじゃない。ほら、帰るよ」

無理やりアルスくんの手をとって家に向かう。しぶしぶ抵抗を止  
めたアルスくんの顔には、戸惑いの表情が浮かんでいた。

「……ユイナ」

「ん？」

「……何というか、……ありがとう」

星野さんと兄貴しかいない？

馬鹿言つなよ私。

春風もアルスくんもいるのにさ、  
贅沢ばかり言つなよポケが。

## 続・高校生の戦場

一睡もしなかった。

……睡眠時間をネトゲに費やしたからね。

寝ぼけた頭を何とか覚醒させ、リビングに辿り着く。

「……寝てないからオハヨーは言わないよ」

「馬鹿」

「どーせ兄貴には分かんない苦労だよ」

止め時がなかったんだから仕方ないじゃんか。

兄貴は何を言う訳でもなく、ただ無言で溜息をついた。

……分かってないな、兄貴も。

そんな感じで朝っぱらから私と兄貴がメンチ切り合っていると、

アルスくんが起きてきた。

「……おはようございます……」

顔が半分寝てんだけど。

「……何でこいつまでこんなに眠そうなんだよ」

あきれ顔の兄貴。

アルスくんは私のネトゲを一晚中見ていて、時々アドバイスとか

貰っていたんだけど……、

兄貴に言っても仕方ないだろうなあ……。

くそ、真面目な人間はこれだから……っ。

「……そっぴや、ユイナ」

兄貴がどうでもよさそうな声で呼びかけてきた。

「……ん」

「お前の学年に転校生とか来た？」

「来たよ？」

「名字、光村だったろ」

「……うん」

こ、これは……何かのイベントのフラグ？

「……星野からの伝言で、『気をつける』だとさ。意味までは聞いてない」

キタ！ 謎ワード！

一瞬ときめいてしまった。だって『気をつける』だって！  
かつこいいにも程がありますよ星野先輩！

興奮冷め止まぬまま学校へ走り、とりあえず教室で寝たフリしながら光村さんを待つ。

何かがあるだろう。何かあるはずだ。

そういえば光村さんとは昨夜、外であったっけ。

……あの子、いや、子っでいつちゃあいけないな。

あの人、雰囲気も何となく星野さんに似ていたような気もする。

何だろ。親戚とか？

……それじゃあつまらないな。宇宙人とか何かそんな……な訳ないか。

曇りの日って、陰気な中にも妙な暖かさというか、ぬるさがあるよね。

……あああー………。みたいな心境。

こういう時、何となく横に誰かがいて欲しいと思う。

何を思っけていても、何をやっていても、教室に一人でいる時なんかは孤独を痛感する時だつてある。ノイズィーな教室に居て、私は一人、今日も妄想にふけつているのである。

……春風が来るまでは。

「よ、ユイナ」

よ、のイントネーションに芝居っばさがにじんでいる。  
そんないつもの声が後ろから聞こえた。

春風の声。

彼女は若干俯きながら鞆を机の横にかけ、ため息をつきながら席に着いた。

エセ大阪弁の少女は今日も、私と同類のオーラを出しながら文庫本を読むのだ。多分。

思えば私は、それぞれが一人ぼっちだった。互いに人見知りだから、互いに一言も喋らずに同じ時を過ごすこともあった。そして……それでも偶然が重なり、いつしかこうして友達とは言える仲になっていった。決して深い仲ではないけど、今はそんな間柄も悪くはないと思っている。

少なくとも、瀬尾さんをはじめとする「ちょっと輝いてんだけど俺達あたし達グループ」（名付け親、私）とのピリピリした関係よりはマシだ。

弱いモノ同士でつるむような連中に共通しているのは、自信の無さだ。

そして逆に、輝いてんだけど系の連中には慢心にも近い自信がうかがえる。

いいよ、自信なんて無い方が謙虚さアピールできるし。

朝から哲学的な自分をちよつとかっこいいと思ったことに自己嫌悪。

ひっくり返すようだけど、やっぱり自信持ちたいなー。

「……そっぴや、ユイナ。結局隕石とかってどうなったんや」

何気なく聞こうとしたけどやっぱり演技くさくなっちゃった感じで春風が聞いてきた。

「やっぱり春風も興味深々じゃんか」

よし、聞かせてやるうではないか。昨日のホッキョクグマ、長鼻、兄妹喧嘩に光村さんのこと……、

「あ」

ふと気付いて光村さんの席を見ると、彼女は既に自分の席に着いていた。

「あああ！？ しまった、忘れてた！ 春香のバカ！ アンタのせいだ！」

「は、はあ？ 何がや？」

「こつなつたら春風にも手伝ってもらうからね！」

春風にげんこつを一発いただきました。

「……暴力女め、関西人は口は出しても手は出さないんじゃないか？ たのかよおおお！」

「関西人ちやうし」

「ちやうんかい！」

「何でアンタまで関西弁やねん」

色々謎だね、この女も。

と、そんなことより光村さんを眺め……待てよ、これって何かストーカーとかそんな感じに……まあいつか。

見たところ、朝の光村さん変わった様子は見られなかった。

「……春風。サンタがいなくていつ知った？」

「……小学校に入った頃やったと思う」

「そうか……。私は、ひよっとしたら今なのかもしれない……」

「……っふ」

鼻で笑われた。もちろんここでいうサンタは比喻だ。比喻なのが……。

こいつに伝わるはずもなく。

「いや、もちろんほんまにアンタがサンタを信じとつたから笑ったんやのうて……。その、アンタならありそうやったからな」

失礼な。

……いや、確かにそう思われてもおかしくない言動はしてますが。

私がしたかったのはサンタの話じゃなくて、期待と裏切りとでもいおうか、何というか……。  
何だろうね。

昼休憩。春風と弁当を食べていると、慢心グループから瀬尾さんが歩いてきて、私に話しかけてきた。

「ちよつといい？ ……須上さんって、三年の星野先輩と仲が良かったと思うんだけど……」

「え？ あ、うん。そうだけど……」

瀬尾さんが私に話しかけてくるのはよくあることだけど、モノを聞いてくるなんて珍しい。

「その星野さんって人、どんな人が教えてくれない？」

「何で？」

「何か、知り合いの知り合いがその人のファンらしくてね？ ……」

向こうにメモあるから、来てくれない？」

「はあ、ファン？ ……まあ、いいけど」

席を立ったその時。

春風が一人になることに気が付いた。

「……どうしたの須上さん。早く来て」

慢心グループはぶっちゃけ輝いている。

私だってあの輪の中に入りたいと思ったことも少なくはない。ただ、春風を一人には……。

一年生の時、瀬尾さんと春香の間には小さなトラブルがあったと聞いたことがある。

瀬尾さんは誰とでも分け隔てなく仲良くする人間にも見えるけど

……、

いつも、春風のことを目の敵にしているんだ。

私にしかついていけない話題を切り出したのも、私を席から立たせようとしたのも、夕飯のおかずが何か一瞬気になったのもルービツクキューブの面が揃わないのも隕石も、多分、全ては春風を一人にさせるため……！

（ハナからツツコミは求めていないし、面白つもりもない。しかし私はこのボケによって自分を落ち着かせ、かつ和みムードを自己の脳内に生み出そうと以下略。反省はしていない）

でも、逆らったら私まで……って、それは今でも半分該当するくらいいいけどさ。

でも、こう、クラスの権力者だから何と言うかあれですよね。どれだろ。分かんねーや。

私はその場に止まったまま、口を開いた。

「……あの、瀬尾さん？　ここで描いちゃダメなの？　実は私、朝から足の調子があれでしてね」

足の調子があれて何？　どれなんだああ！？　とは自分でも思いますよ。

「……そっか。何か無理にごめんなさい。……別の人に聞いてみるから、バイバイ」

そのバイバイは、まるで誰かを崖から突き落とすような圧力が含まれていた。

もちろん怖くはない。ないけどさ。

すつきりしない。どうにも劣等感が湧いてきて、悲しくなる。

ホントはあいつらに憧れでも持っているのかも知れない。……というか、持ってるんだよ、きつと。

「……なあ、まさか、ウチに構って向こうに行かんかったんか？」  
春風はひどく不安そうな声で聞いてきた。

私はちよつと悩んだけど、首を横に振ることにした。そして、  
「……私、小金持ちだから。だから大金持ちが嫌いなんだよね」  
意味不明な台詞を、頑張ってかつこよく言ってみた。

「……はあ……？」

しばし沈黙。滑ったような私の発言。……反省はしていない。

多少空気が読めなくても、私は私なりに居場所を作って楽しめばいいんだ。ちよつと空気が凍ったり、何か收拾がつかなくなったりしても、私なりに楽しめれば……。

いや楽しめねえよ沈黙は。

で、そんな空気を壊したのは、春風でも瀬尾さんでもなかった。

「聞いていたんだが……。須上さん。あなたは星野という人物について詳しいのか？」

忍者よりも忍者らしい動きで、後ろからひよっこりと光村さんが現れた。……って、

「ぎゃあああああ！」

声がデカ過ぎたことくらい自分でも分かりますよ、ええ。

慢心グループも含め、誰もが私と光村さんに注目し始めたのが分かる。

「み、みつ、みつ、み、みみつ」

「光村だ」

だって、星野さんがアンタに注意しろって……！

もう遅いや。

おそらく、これが真の意味での光村さんの教室デビューになるよ  
うな、そんな気がした。意味は自分でもよく分からん。

## 大江山伝説の余波

星野さんについて知っていることといえば、性格とか歳とか、そんなありふれたことしか知らない。兄貴が好きだとか、やたらギャルを否定することとか平安時代が好きとかいった細かいことは説明する必要もない……はず。

「十七歳で、男みたいな女？　あなたが星野について知っていることはそれだけなのか？」

「だけってことはないけど……あの、えっと……」

「だつて『気をつける』だよ？　私、アンタに気をつけなきゃならんのですよ？」

特に星野さんのことについては、なるべく多くを語らない方がいい。直感がそう叫ぶ。

今まで星野さんと付き合っていた私だから分かるこの感じ。だつてあの人、本当に危険な世界にも片足突っ込んでんだけどもん！　まあ、そこがまた良いのだからなっ！

光村さんは私の目をじーじーっと見つめて、私の言葉を待っていた。何か、催眠術でもかけられそうで怖かった。

「……星野剣は私を恐れている。だから詳しくは語れない。そういう解釈で問題は無いか？」

「な、何でそんなん知つとんじゃこいつ！」

「……凶星か。まあ、そうだろうとは思っていた。あなたとは、またいずれ長話をすることになるだろう。さらば！」

そう言つて彼女は走り去ってしまった。多分、クラスの全員が、彼女の頭を疑つたことだろう。

……星野先輩と話してみないと、何も分かりそうにないなあ。

「……え、光村さん、昼の授業は？」

「誤魔化ししてもらえないか」

嫌じゃボケ。

夕方、三年生の教室に向かう。

教室にはほとんど誰も残っていなかった。星野さんだけが一人、険しい表情で外を見ている。

「あ、星野先輩……」

と言って教室に入ろうとしたところで、

「ちよつとアナタ、邪魔！」

「うげ」

後ろから走ってきた二年生（私の同級生）が私を突き飛ばし、星野先輩に手紙らしきものを突き出しながら頬を赤らめて俯いた。

「星野先輩！　ずっと前から憧れてました！　私のお姉さまになって下さい！」

……うわぁ。

色んな意味で言葉もない。何と云うか、実際にああいう輩がいるんだなーとか星野先輩が女にモテるっていうのは本当だったんだなーとか色々思うことはあるけど、うん。即フラれた彼女を見ると言葉もクソもない。

「あたし、諦めませんから！」

彼女は星野先輩に泣きながら言うと、そのまま走って私をもう一度突き飛ばし、影から見守っていたらしい瀬尾さんにしがみついて泣き続けていた。

「え」

……な、何で瀬尾さんが。いや別に有り得ない話とかじゃないけど、不意に苦手な相手が見えた時と違ってドキつとするじゃん。ヤバ。表情に出てなければいいけど……。

「……………」

「……………」

何か睨まれた。そんなこんなで私と瀬尾さんの視線が交差する。そういえば、瀬尾さんは昼間に星野さんの情報を集めていたっけ。あれはあの子、いや子って言っちゃいけないや。あの子の為だったのか。

そういう面倒見のいいところも、彼女の人望の厚さの理由の一つなのかもしれない。

……でも。

偏見かもしれないけど。それでもやっぱり「利用している」という風にしか見えないんだよね……。フラれたあの子のことも、周りの仲間達のことも。

「おい、ユイナ。俺に用があつて来たんだろ？」

乱雑な男口調が、私の意識をこの三次元へ呼び戻す。兄貴に限りなく似ているが、声は女性のもの。星野先輩だ。

「……はい」

教室の外から適当に小声で返事しつつ、最後にもう一度だけ瀬尾さんを見る。瀬尾さんは私を再びキツイ目で睨んだ後、母親のような表情で、泣きじゃくる同級生をなだめながら去っていった。

「……で？」

星野先輩が言った。

「いや、何が『で？』ですか。光村さんについて、もう少しちゃんと説明して欲しいんですけど」

気をつける、だけの忠告も確かにかっこいい。けど、そんなだけの理由で転校生を奇異な目で見たり疑ったりするのは流石に後ろめたさがある。責めて、どういう風に気をつけなければならないのかを知らない。

犯罪者という風でも、隕石と関わりがある風でもない。確かに言動は若干変だけど、気をつけるって……何？

「……なあ、正直に言つと」

星野さんが、やや言い難そうに口を開いた。告白に近い。罪の。

「隕石とか光村とか色々関係することで、お前に見せなきゃいけないものがある」

罪と言っても、刀とか持って腹を切りそうな感じでね。そんなくらい気迫のこもった声だった。

「それを見せたら、お前の俺に対する考えが変わっちまうかもしれない。ひよっとしたらお前の中の世界がひっくり返っちまうかもしれない」

流石にこの真剣な空気を壊す私ではないよ。うん。飲まれたくないから空気は読まないようにしてるけど、今回ばかりは空気は壊さない。ひっくり返り上等！ 覚悟オツケーでございやすよ……あれ？ 色々ぶち壊したな。

などと頭の中で面白くもないコントを繰り返してないと、今、ワクワクとドキドキとバツクバクに押し潰されて死にそうなんだ。

そんな興奮状態の私をさらにバツクバクの毒気土器にするように、星野先輩は言う。

「無理なことを言うようだが……何があっても、私を信じていて欲しい。……駄目か？」

「駄目じゃないです！」

考えるより早く、口が動いた。

「……もう何でもいいです。こんな漫画みたいな展開が続いてくれるんなら、私はどこまででもついて行きますから！」

でーん。

連れて来られたのは、でっかい和風の家。

「どおおおおお！ スゲええええええ！」

思わずそんな声も出る。これこそ屋敷つてやつだ。デカイ。デカイスゲー！ ヤクザの家という可能性も出てきちゃいますよ、これは。……どうしよう。

「星野先輩の家……ではないですよ？」

「元実家」

元……という言葉に、当然引つ掛かる。元実家？ 親の離婚とか、不幸な出来事とか、何かそんな事情でもあるのだろうか。

表札に書かれていた名字は「星熊」。どうしてもあのホツキョクグマを思い出してしまう。しかし表札も立派。我が家のかまぼこ板とは格が違う。(ウチが変なのかもしれないが)

「……っーか、珍しい名前ですよ……。セイユウ？」

「ホシクマだ。歴史は平安時代にまで遡るんだぜ」

勝手に門をくぐり、勝手に家の中へ。

「ばーちゃん、おるー？」

「はいはい？ ありや、剣ちゃんやないの。どうしたん。友達連れて来たんか？」

「違うけ。こいつ、この前言つちよった隕石から地球守る子や」

「ああ、こげん可愛い子やったんか。あたしゃもつと大柄なデカイん想像しよったけえ」

「家ん中入れてもええやろ。トオルにも会わせてみたいしな」

「あん子最近あれちよるけえ、あんま刺激すなよ」

「おう、分かっちよらあ」

どこの方言だこれ。何か色々と混じってないか？

『ばーちゃん』との話が終わると、星野先輩はズカズカと家の中へと進んでいった。私も慌てて追いかける。

「ちよい待ちい。話しときたいんじゃが」

ばーちゃんは和やかな声で、私を呼び止めた。

「……はい？」

怖い人ではなさそうだけど、家の雰囲気とかでどうしてもプレッ

シャーがかかる。

「剣ちゃんはある言っちゃったけど、アンタ、あの子の友達やる?」

「は、はあ。まあ。こ、後輩です」

「同じようなもんや。でな、アンタに言っときたいんやけど……」  
分かったから早く言ってくれえええ。

「あの子、ちよっと凶暴なところもある思っんやけど、見捨てんといてあげてな」

……あれ、終了?

「え、あ、はい。大丈夫ですよ」

「……そかそか。何や安心したわあ」

アニメとか映画で時々ありそなシーン。何か、こっ……、

そういうのは兄貴に言っただけで欲しいな。と思った。

ばーちゃんに案内され、一家が団欒するのであろう広い場所でテレビ見ながらお茶を飲んでいると、星野先輩が一人の少年を連れて戻ってきた。

「離せよ、姉さん！ オレはもう一生あの部屋で過ごすんだ！」

「うるさいな。地球はあと一年じゃ終わらねえんだから、一生あの部屋でなんか言っんじゃねえ！」

「いや、俺が終わらす！ でっかい隕石で……。って、誰だそこのお茶飲んでる奴！」

ぶへらっ（お茶を吹き出した音）。

その少年の顔を見て、思わずお茶を吐き出してしまった。

いや、こつなるのも無理ない状況だよ。だってさ、その少年って、あのネットゲームの主催者……」

私が指を差して言うと、向こつも驚いたように目を見開いて私を見た。

星野先輩は溜息交じりに私と彼を見て、もう一度溜息をついた。  
「……………こいつの名前は星熊ほしくま透生とおる。ヤシャって自称してる、俺のイトコだ」

ってことはこの少年は、私のパソコンに映ってた人で地球に隕石を落とそうとか考えている人で、知ってか知らずかアルスクンを呼び寄せちゃった人で……………。

……………いやいやいや。混乱する思考と感情の中で、一言言っておこう。

胸が熱くなりますよね（当事者的に）！



の世界みたいで、私が憧れ続けたような話……。

時は平安。大江山には酒吞童子やら茨木童子やらいう鬼がいて退治じゃーとかしちゃってウンタラカントラ。

その後、退治された鬼達が残っていた子孫は、鬼の力と科学の力、そして魔術や超能力、漢方薬など様々な力を組み合わせて改良を続け、ついには鬼の力を軽々と凌駕したすっげえ力、その名も超鬼の力を作ったのだった。

「ネーミング、やたらシンプルですね。超ですか」

「……誰も、他に思い付かなかったんだ」

現在、鬼の子孫は皆、体内に超鬼の力を含んでいる。だが、力の量には個人差がある。才能と同じである。

「で、何故か超鬼の力を誰よりも使いこなす透生は、このとおり引きこもりライフをエンジョイ中だ」

苦勞がにじんだ目をこすり、先輩が言った。

「エンジョイなんか出来るか！ この疎外感が姉さんとその地球救済者に理解出来るのかよ！」

反論する透生くん。……人によっては屁理屈だと思えるかもだけど、私は彼の感情が何となく分かった気がした。

教室では大体一人で、もっと孤独な春風と昼飯を食って、イケてる側の女子からは時々笑われ、何かもう何もかも嫌になってフィクションに逃げた。……私とて、一歩間違っていれば引きこもりになっているかも知れないんだ。

「透生の超鬼の力は隕石を操るほど強かった。そしてそんな透生は世間を恨んでいる」

「地球終わりましたね」

「お前が言っちなあああああ！」

いや、だって……ねえ。

あっさり言えてしまう辺り、私も案外この星に興味が薄れている

の  
か  
も  
知  
れ  
な  
い  
。  
…  
…  
な  
ん  
て  
、  
自  
分  
で  
言  
っ  
て  
ち  
ゃ  
救  
い  
が  
無  
い  
ん  
だ  
け  
ど  
ね  
。

### 大江山伝説の余波 3

幽体離脱かと思ったけど、多分これは夢だ。

そう思った瞬間、その夢は少しずつ溶け始めて、何かもう原形が無くなって目が覚める。

でも、今回はなかなか溶けなかった。

……多分、この夢が記憶をなぞったものだから。この夢は過去にあった出来事。ノンフィクションを見るのが、一番辛かったりするんだけどね。

「ルックスは最高。実家はやや貧しいがそこがまた良い。テストはいつも平均から上位辺り。スタイルもエロい。しかし空気が読めない。……桜木春風監察日記。作、須上ユイナです」

「涼しい顔でよく言えるな」

「まあね。私は君が一人になる理由が分かる。けどさ、自分がどうして一人なのが全然分からないんだ。なるべく愛想は良くしてるつもりだし、それなりになじもうと努力したのに。……そりゃ、人見知りだけど……」

「奇遇やな。ウチはアンタが孤立する理由が分かる。せやけど自分が一人になる理由は一切分からん」

「……何やかんや言っつて、今、私達は二人で話している訳だけどね。だから、何と云うか……さ。あの、お昼とか一緒に食べてくれない？ 何となく瀬尾さんに嫌われてるみたいでさ。入れないんだ」

ほんの数か月前のことだった。クラス替えして、友達がいなくなつて、疎外感にほぼ飲まれたあの春。

桜木春風は、私の春を名前で嘲笑っていた。本人には何の意図もないはずだが、うん。何と云うか、桜とか春とかいう名前を持つ人が暗い顔して一人で座ってんですよ。

桜木春風は、春の変化、別れ、寂しさ……要するに負の部分を、  
全身で物語っているように思えた。

正直に言つと、もっと良い友達が出来たら切り捨てよう、なんて  
心のどこかで思っていた。けど、いつの間にか春風の良いところや  
面白いところも見つけちゃって、気付いた時には相棒同士だった。  
二人で話して、二人で陰にいて、何と言うか二人なのに孤独で……  
そんな、傷を舐め会うような最低の関係。二人揃って顔はスッゲー  
可愛いからさ、時には幻想を抱きがちな男子から告白されることも  
あった。お互い全部振った。理由は分からない。

「……なあ、ユイナ。もし地球が減ぶとしたら……アンタならどな  
いする？」

「……ざまあって言つて笑うよ。だって、こんな世の中はつまらな  
い。生まれ変わったら、宇宙旅行が出来る星で暮らす。……それが、  
当面の夢かな」

んで、夢は覚めた。ここはリアルだと感じながらも、何とな  
く目を開けない。名残惜しいし、現実に帰りたくないんだ。

一年後、この星は隕石で多分滅ぶ。それを食い止めるのが私の役  
目で……。いや、素直に言えばさ。鍵を握りつつも滅びを黙って待  
つっていうのも悪くないと思う。

アルスくんや星野先輩に流されていたんだ。救わなきゃいけない  
ってさ。

そういえば今何時だっけ。朝だっけ。昨夜の記憶も思い出せない。  
どうしたんだろ私は。というかさっきからベッドが揺れて……いや、



と透生は何も喋らず、黙々と串カツを食べていた。

持ったコップが震えていたところから察するに、向こうも緊張しているらしかった。なんかそのせいで急に緊張がほぐれた私であった。

「トオルくん……だったよね」

「あん？ ……うん、まあ、合ってるけど。そっぴやお前の名前、まだ聞いてなかったな」

「ユイナっていうんだ。結ぶに野菜の菜。結んで実感的な感じ」

「……透明に生きるなんて虚しい名前よりはマシだな」

彼は自嘲気味に笑いながら言った。

「引きこもるとき、本当に自分が世間から消えちまったみたい感覚があつてな……。何と言うか、確かに透明人間なんだよな」

「いやいや、透き通るってカツコイイじゃん。私だってさ、小学校の頃は絞殺しの木……とか呼ばれてさ」

「あー、他の木に寄生する奴だっけか」

今考えれば不思議なあだ名だ。

私の名前は絞めるのではなく結ぶ訳だし、大体絞めるのは菜ではない。だけど、結菜が絞殺しの木っていうのは、何故だかいやなくらい納得出来る。

あの頃から、私は集団が嫌いだったのかも知れない。人間のしよもなさになつて、気付いていた。

その後も、透生との会話は不思議なくらい盛り上がった。

引きこもりで、生意気で、地球を滅ぼそうとしている透生。

……この人とは、もっと違う出会い方をしたかった。

ということがあって、何か気が付いたら運ばれていたという稀有

な状態。

大人になって酒とか飲み始めたら、こういうことも増えてくるのかもね。

「ユイナ。まず一つ言うけど、透生と仲良くなり過ぎだ」

「そりゃあ仕方ないじゃないですか。何となく分かるんですよ、あいつの気持ち」

「引きこもって勝手にキレて地球に隕石を落とそうとする奴の気持ちか？」

「いえ……気にはなってます。私があいつ主催のネットゲームの説明を見た時、あいつはまるで隕石を食い止めるのは余興に過ぎないというような話をしていました。けど、今日のあいつの口調は間違いなく隕石が落下するというような、余興もクソもない、これが本番みたいな感じで……」

人間としての知能、協調性……。社会の逆風や誘惑に打ち勝つ、本当の強さを持つものがあるのかどうか見せてもらいたい。

彼はそう言っていた。ゲームを盛り上げるため？

……そんな訳ないじゃんか。

「……止めて欲しいんですよ。ゲーム内の他のプレイヤーをまとめ、隕石の進路を変える方法を知性を持って見つけだし、恥も外聞もなくネットゲームばかりやっていられる人に。」

この世の中に、もしも本当にそんな人がいたら、自分も生きていたいと思えるかも知れないって、そんな風に思っただけじゃないかって……。私の憶測ですけどね」

……トオルはきくと、私と同じなんだ。

学校の中で見えない殻を被るユイナと、引きこもりという見える殻を被るトオル。

私はどうしようもなく彼に同情していた。だから……決意した。

「……私、隕石止めますよ」

「ああ。頼むぜ。俺だっけさ、イトコが魔王じみたことをするのは

見たくないんだ」

私が。私が透生を止めてみせる。考えてみれば、何かを目指そうと思ったのはこれが初めてだった。

それから五分もしないタイミングで。

ゆらり。前方で、何かが動いた。

「ん……？」

ゆらり。ゆらゆら。

火の玉だった。

「ぎゃあああああ！ 先輩！ あれ！」

「ゆ、ユイナ、落ち着け！」

「はつきり見えないから近寄らないと！」

「馬鹿かあああ！ お前は馬鹿かあああ！」

空から人が振ってきたり超能力で浮かされたりしたとはいえ、私にはあまりにも超常現象に慣れ過ぎてしまった気がする。

けど、そこに人がいたのを見たら流石に驚いた。

少女だ。不機嫌そうな目つきに、ショートカットに和服。暗くて

色は見えないけど、どちらかという黒に近い色。

その姿は、西洋風の人形と日本のコケシを足して究極に可愛くしたみたいに見えた。

「……光村さん？」

「あなたに興味はない。……私は鬼を狩る者だから」

「……鬼を……狩る？」

それって、星野先輩が狩られちゃうってこと？

瞬間、光村さんの体が弾丸のようにはじき飛ぶ。

「せ、先輩！ 避けて！」

「ユイナ、先に帰ってる。……大丈夫だからさ」

先輩は飛びかかってくる光村さんを流れるように避けると、手だけをこちらに向けて軽く振った。

……帰る訳がない。こんな展開、見逃せる訳がないじゃないか。

## 大江山伝説の余波 4

「……星野剣さんですね」

「そうだけど」

「……噂どおりの美人さんですね。ちよつと見惚れちゃいました」  
無表情のまま、光村さんが言う。本人は隙だらけなのに周囲に火の玉が飛んでいるから安全っばい。

星野先輩はだるそうに火の玉を目で追っていたけどすぐ止めた。  
普段は無意味な行動が多いくせに、こういう時には最善の行動だけを瞬時に選ぶことが出来る。それが星野剣です。一家に一台、星野剣。

緊張感とか照れくさくて持てないんだよ。まともに見ると怖いし、斜に構えることくらい許してもらおう。誰にだろ。ウダウダ頭の中で考え込むのは私の悪いくせだな。

「出来れば見逃して欲しいんだけどなあ。俺さ、九時には帰って寝ていたいタイプなんだよね」

「……零時まで遊んでおいて、」  
光村さんが飛び上がる。もはや人間ではないジャンプ力で宙に舞うと、

「どの口が言っているんですか！」

そのまま星野先輩に急降下。だが先輩もやわじゃない。光村さんの蹴りを頬で受け、そのまま足を掴んで空中へと投げ飛ばした。

結果、お互いに無傷っばい。宙に投げられた光村さんはともかく、勢いよく頬を蹴られた星野先輩が無傷ってどうということじゃない。

光村さんは不満げに溜息をつくと、あくまで冷静に言葉を紡いだ。  
「……避けれたはずですけど。何故受けたんですか？」

「格の違いを見せるため……とか言ったら逃げてくれない？」

「御冗談を。私は貴方を殺しに来たつもりなんですけどね」

ただの喧嘩じゃないとは思っていたけど、本気で殺す気とは。

そりゃそうだーと言われたら何とも言えないんだけどさ、流石に健全な高校生である私は知人に死なれるなんてそんなこと想像もしたくもないし何と云うかあれですよ。

「……ああくそ、もう」

止めなきや。自分を自分で誤魔化している場合じゃないっつーの馬鹿か私は。

いつだって独りよがりな思考に逃げて、自分の不幸とか都合の悪いことを全部周囲のせいにした。私は高度なことを考えているけど、春風も瀬尾さんも誰も私の崇高な思考についてこれない。私は悪くない。私は……。

おそらくあなたは地球の運命を担っています。

アルスくんから言われた時、飛び上がるほど嬉しかった。だってさ、私が特別だってことが、ようやく照明出来たから。やっぱり私は周りとは違うんだってことが、ようやく……。

でも特別でいるには、私は無力過ぎる。

結局私は凡人の一人なのかも知れない。目の前で繰り広げられる戦いは確かに私がずっと探し求めていた「特別な」ものだったけど、ただどそれを目の当たりにした私は、あまり喜びを感じることが出来なかった。

私は弱い。この二人に敵う自信が無い……。

悔しい。この戦いのレベルの高さが、私の存在そのものを全否定しているようにぞ。

……悔しいよ……。

なんて言っている間に戦いは激化していた。火の玉を指先から放つ光村さんと、その火の玉を掌で受け止めて無傷な星野先輩。

先輩は防ぐばかりのようだったが、苦戦しているのはむしろ光村さんの方だった。

「……真面目に戦う気はないんですか、鬼のくせに」

「正確には鬼じゃなくて人間なだけだな……。それでもダメ？」  
「ダメです。死にたくないなら私を殺して下さい」

哀願するような声だった。でも、相変わらず光村さんは表情を変えない。……それが不気味だった。

何が彼女をそこまで必死にさせるのか、私には分からなかった。

教育？ 宿命？ こだわり？ ……全部有りそうだし、全く共感出来ない訳でもないんだけどさ。でも……躊躇なく殺して、ねえ。

五分後。私はこの状況を打開する術をほどほどに必死で考えつつ、この二人の漫画みたいな戦いをちよつと楽しみながら見ていた。

実際に見ていると、超鬼の力というものがどういものがよく分かる。

星野先輩は光村さんの攻撃が当たる瞬間、当たりそうな部位に力を集中させ、見えない壁を作っているのだ。基本的には掌で受け止め、その先に壁を作って相手の攻撃を防ぐ。先に作った壁を攻撃に合わせて動かすことも出来るから、合理的だ。

けど、その防御は一部への集中的な攻撃にしか通用しないんじゃないかな……と私は思う。

だってさ、広範囲に広がる爆風なんかは体全体を守らないと防げない。けど、そんなことが出来るのなら、先輩はこんな戦い方をせずに最初から体全体を防御しているはずだ。

力の温存？ ……それならもつとまずい。疲労した時にたたみかけられたらオシマイじゃんか。

「くっそ……しつこいなお前。ちよつと疲れた」

オシマイだああああああああ！

「待った待った待った！」

私は反射的に飛び出し、続けざまに攻撃を仕掛けようとする光村さんの前に立ち塞がった。

「ちよ、ユイナ！ 帰ったんじゃないのよ！」

「いや気付くでしょ！ 結構どうどうと見てましたよ私！ それより大丈夫なんすか!?」

「当たり前だろうが……」

そう言つと、先輩は私をひよいと抱えて急に走り始めた。

「な、何ですかいきなり！」

「いや、考えてみれば逃げることを忘れていた」

「馬鹿ですか！」

「ある程度自分が強くなると、あんまり逃げようなんて思わないもんだ」

自分が強いつて言い切つたよこの人。嫌味に聞こえないのはすごいけどさ。

「……じゃあ、逃げたがる私はまだまだ弱いつてことですか」

「弱いままでいられるのだって、ある意味幸せなんだぜ？」

その言葉は、私には強者の勝手な言い分にしか聞こえなかった。

「つか、逃げなかつただる。熊の時も今回も」

「……好奇心に負けました」

「バカタレ」

ふと、後ろを向いてみる。光村さんが追いかけてくるような、そんな気がしたから。けど、何も無かった。

「……今日はこれで終わりなのかな……」

こんなことがあつて、私の世界が大きく動きを見せた夜でさえ、

町の姿はいつもどおりの平和を語るだけだった。

瀬尾夏鈴さんの遺憾千万（前書き）

あまりにもあれなので書き直してたらページ数余ったんで瀬尾さんメインに書こうとしたら結局ユイナのターンだった。重要な話ではないので読み飛ばし可ですこじ。

## 瀬尾夏鈴さんの遺憾千万

瀬尾かりんは人間である。あだ名はまだない。

金持ちで才能もあり、その上面倒見の良い完璧な彼女を相手に、あだ名呼びをするような恐れ多いことは誰も出来なかったのである。

恐らく。クラスの中であだ名が全く無いのは、クラスでも立場的弱者である須上ユイナと桜木春風、転校生の光村と自分くらいなものである。

あだ名なんか必要無い、と思いつつ、その事實は完璧故の孤独の現れであるような気がしてならない。

それに、明らかに立場の弱い三人と自分が並ぶことは、プライドの高い瀬尾にとっては耐えがたい屈辱であった。

……もう、昔とは違う。

全部、手に入った。なのに。

美貌も強さも手に入れたのに。なのにどうして……。

親友が出来ない。

須上ユイナと桜木春風は、互いに親友と呼び合う仲だ。

他の誰かなら構わないのに、よりによってその二人。……瀬尾かりんの心は、激しい嫉妬に満ちていた。

醜いと、自覚しながら。

「……何か、隕石の動き不自然だよな」

新聞を見ながら、アルスくんが言う。

「それは、まあ。地球にぶつからないといけない訳だからねえ。……やれやれ。高校の人間関係もピリピリしてるし、地球救う自信も無くなってきたなあ……」

「ええええ！ 僕がこの星に来た理由が無くなる！」

こんな日々がずっと続くような、そんな気がしていた。

学校では光村さんや瀬尾さんとの関係に悩み、家では隕石とネットゲームに悩まされて。

クソみたいに辛くて、希望なんてどこにもない。……そんな道が、永遠に続くような感じ。

「……結菜。あのさ」

アルスくんは、急に真面目な声になって言った。

「人の生活はさ、全てのこと相互に関係し合っている。だから、学校での人間関係やそれ以外のことも……」

「分かってるよ。……出来るだけ安定させるからさ」

嘘だ。絶対安定しない。学校での平穏なんて、瀬尾さんみたいに位の高い人間でないと作れないんだ。

地球の運命が私にかかっているなら、私に関わる全ての人にも、多少は地球の運命が背負わされているということになる。……それなら、他の誰か……例えば瀬尾さんとか、の責任にして、逃げてしまうのも悪くない。

眠くてはつきりしない頭で、そんなことを思った。

……本当に私は、世界を救うのかな。

## Weak student

学校に行きたくありません。

瀬尾さんが怖くて……。ではない。

ついでにこれは別に不登校宣言ではありませんよ。ちゃんと行き  
ますよ学校。

……光村さんと顔を合わせたくないですよ。

何せ隣ですからね。

先輩を殺そうとしたあの光村さんが、隣で授業を受けたり弁当食  
べたり何か色々するんですよ。もう、何か考えただけで……。

「あー」

「……だ、大丈夫？」

アルスくんが私を気遣う。というか、一時間ずっと溜息つかれた  
ら、気遣わざるをえないよね。

昨日はネットゲームをする気力もなくさっさと寝た。で、起きて  
昨夜の星野先輩と光村さんの戦いを思い出して溜息連発。

憂鬱だけどねえ。行かないと駄目なんですよ。着きました。

着きました。……何となく繰り返す。繰り返してもやる気になれ  
なかつた。

しかも既にいますよ隣にいいい。

「お、おはよう、光村さん」

「……昨夜、何か見たか？」

「うん」

普通は慌てて「見てない」って言うところだよ。答えてやつと  
気が付いた。やべえ。緊張感のあまり喧嘩売っちゃった。

「……もう一度聞く。昨日、何か見たか？」

けど。ここで嘘をついてどうなる。……多分、もう一度先輩が狙

われる。また逃げ切れる保障も無いし、そもそも光村さんの意図が不明過ぎる。

ここで何か聞かないと、何も変わらないままじゃんか。

「見たよ。最初から最後まで全部見た。アンタが先輩のほっぺを蹴り飛ばしたところも、それで先輩が無事だったことも見た。ついでに鬼の力のことだって知ってる。……文句があるなら言つてよ」

「……そう言うのなら、貴女も鬼と同じだ。訂正するなら今のうちだぞ」

「マジでか」

ターゲットにする、ということか。やべえ。私なんか瞬殺されちゃう。

……見ていないことにして、一度星野先輩に任せるべきなのかな……。というかそうしよう。うん。ここで死んだら地球が絶望的だし。うん。

「見てません！」

「よし」

いいよ。これで光村さんを怖がらずに学校来れるし、私も地球も安全だし。

で、何でちよっと涙が出てくるんだよおおおお！

情けない。私、全ての負担を星野先輩に投げちゃったよ！ 確かにあの人は強いけどさ、いくらなんでも役立たず過ぎるじゃんか私！ 腐っても地球を救うんだろぅが私！ 地球を肩に背負う者が、こんなところであっさり曲げるなんてことが、

「許される訳ないじゃんかあああ！」

勢いよく突きだした拳は光村さんの頬をかすめ、そのまま光村さんによって体ごと投げ飛ばされる。私の勢いを利用した華麗な反撃だけどちよっとこれ危ないよおおおおおお！



「せ、先輩！ 逃げないと！」

「星野剣、覚悟！」

いきなり飛びかかろうとする光村さんを、私は何とか後ろから止める。

瀬尾さんはとりあえず状況を読んで、私と一緒に光村さんに絡みついた。……いや、止めたってことです。

「……やれやれ。元気だなお前ら」

「複数形ですか先輩！」

「事実だろ」

「……そうですね」

元気、ねえ。今の私達の異常行動の原因は星野先輩にあるのだが。へらへら笑っている星野先輩に毒気を抜かれたのか、光村さんも大人しくなった。

「で、何やってんだよ。こんなところで」

「……噂になってませんか？ ドア壊した二年生の話」

「聞いたけど」

「あれ私らです」

「馬鹿やってんな」

「ですね。……でも、楽しいですよこういうの」

私の楽しい発言に先輩は笑い、瀬尾さんは啞然とし、光村さんはノーコメントだった。

こういう生き方をし続ければ、意外と退屈なんて味わわずに済んだのかも知れない。

はしゃいでドアを壊して、積極的に何でもやって。それで失敗したとしても、笑って何とかしちやてさ。そこで次のチャレンジを探して……。そんな生き方。

それでも良いと思えた。今までの私には決して届かない、暖かい生き方。

……けど違う。そんな生き方は妥協に過ぎない。

生きている間のことしか考えないなんておかしい。幸せなんて幻で、所詮はその場しのぎの慰めなのにさ。みんなそれを追いかけてる。

違うんだよ私が求めているのは。

異世界があると分かって、鬼の力があると分かって……。

それでも人並みの幸せしか追いかけれないなんて不幸だ。

私は地球の救済者になるんだ。孤独でも良い。それが私にしか出来ないことなら。

……それが、私の価値になるなら。

## Weak student (後書き)

相変わらず何かこんなんですが感想くれたらクソ喜びます。  
悪い点でも参考になるんで……。

## 異常者と異世界人・参（前書き）

説明って難しいですねえ。どうしてもちやこちやしてしまいます。ということでも数回書き直しておりますが、説明の内容に大きな違いはありません。

## 異常者と異世界人・参

「ドア壊したバカが三人いる、と言う話を聞いて、どうせ男子が星野のどちらかだと思っていたんだが」

風紀担当の男性教師は、何とも不思議そうな顔で私達を見る。

「……どうやってたらお前らがドア壊すんだ」

私と瀬尾さんと光村さん。

教師から見れば、大人しい優等生とカリスマ的優等生と転校生である。

こっぴどく叱られるものと覚悟していたけど、教師の方も二度目は無いと判断したんだろうね。三十秒程度の小言の後、

「次からは気を付けるように」

とやんわり釘を打つだけで、さっさと私達を解放してくれた。

「……まあ、不細工いなかったしね」

「女の先生じゃなくて良かったわね」

光村さんは既にこの場にはいなかった。行動が早いのも、鬼を狩る者としての心得なのかも知れない。

「んじゃ、教室に戻ろうか」

「そうね」

私が職員室から東へ進むと、瀬尾さんは西の方へ進み出した。確かに階段さえ上れば良い訳だから、どっちからでも帰れるんだけどさ。

……何だこれ。この流れで、二人バラバラに帰ることになるとは思わなかったよ。

そのまま、授業は何事もなく進んで、ドア破壊も単なる笑い話に変わっていったさ。

「それじゃあ、今日はこれで解散。帰りにドアを壊したりするなよ」  
担任が言う。別に、私達に対する嫌味という感じではなく、おちやらけた冗談っぽい言い方だった。  
学校、終了。

瀬尾さんは皆に、登校したら須上さんが飛んできたという話を笑話のように語っていた。ネタがある時、ああいう集団は盛り上げて、特有の輝きを見せる。  
皆、笑っている。

「そもそも何で飛んできたのかっていうと、光村さんが投げたみたいで」

「えー、何それスゲー。スゲーっていうかスゲー馬鹿」

「ぶつかる瀬尾さんも笑いの神様に見守られているというか、笑いの呪いにかかっているというか」

まあ、自虐も多少は入っているみたいだけどさ。

……私は須上さんにぶつからただけで、被害者だ。悪いのは全部、ぶつかってきた須上さんの方だから誤解しないでね。

という解釈も出来るような内容にも聞こえなくもない。……被害妄想するのも情けないけどさ。何というか、案外私はネガティブなのかもね。

とりあえず良くも悪くもネタの中心人物である私は、集団からの視線をそれなりに集めている……らしかった。そっちに目を向けるとちよくちよく誰かと視線が合う。

……ここで、苦笑いでもしながら近付けばね。案外あのメンバーの一人になれるかもですよ。

そしたら瀬尾さんとも今までよりはマシな仲になって、少なくとも

もこれまでより明るい日々が始まる。

あんまり話したことなかったけど須上さんって面白いよねー、という流れだつて無きにしも非ず。いつの間にやら人気者。ゲハハ。……なんだけどさ。

万が一にもここで馴染めたとして、

満足して、

変わったとして、

悩み続けたことを過去の出来事にする……なんていうのはさ。今までの私が無駄だったって否定するみたいで、怖い。

それにさ、イケてる集団の中に入るって、結局は何も考えない馬鹿になるみたいで悔しいんだよね。

悔しいし、春風を裏切るみたいで……。

だから、行かなかった。

……行けなかった。

帰宅。すっかり夕方。なんか溜息。

私の部屋では、働きもせず学校にも通っていない居候が、ネットゲームでレベル上げに必死になっていた。

彼は自らをアルス、または坂本竜馬と名乗り、地球が危機だとか怪しいことを……。

と冷静に文章にすると、とんでもなく駄目な人間の話としか思えないよね。

少なくとも、実際に彼がここに来た様子を見た私や、私と共に異

常な現象を目の当たりにした兄貴や先輩以外には、彼のことは信じられないと思う。

「記憶喪失のホームレス高校生っていうか、ただのプー太郎だよ、君」

「自分でそう思うよ。第一、通う高校が無いのに高校生を名乗ることに無理があつたんじゃ……」

アルスクンは自嘲気味に笑いながら、軽く溜息をついた。

記憶喪失高校生、坂本竜馬。

あの設定は流石に即興過ぎたか。母さん達に嘘がばれるのも時間の問題かも。けど、だからって本当のことを言っても信じないだろうしな……。

いや、母さんの場合はすんなり受け入れてしまつかも。それはそれで怖いや。

「むしろ、ばらしちゃおうか」

「いや、ちよつと無謀なんじゃないかな……」

まあ、ほつたらかしても問題は無いでしょう。緩い一家だしね。

それよりも、問題はゲームの進行具合。

「そんなことよりも、問題は僕がここにいる理由だ」

「……は？ ここにいる理由？」

「うん」

今更何を言つてんだこの異世界人は。

「そりゃあ、隕石から地球を守る為じゃないんかい」

「ちやうんかいコラアワレエ。何人だ私。」

しかし、アルスクんはやりわりと首を横に振った。

「君から得た最近の情報を元に、色々考えたんだ。ゲーム主催者の正体や、超鬼の力と呼ばれる一種の超能力の存在のことを踏まえて、普通に考えればこうだ。」

超鬼の力を使いこなした星熊透生は、何故か人間を嫌っていて、自身の力で隕石を操り、地球を滅ぼそうと思つた。ただ、ひよつとしたら自分を理解してくれる者がいるかも知れない。だから自作のネットゲームに賭けることにした……と」

「……普通に考えればってことは、普通じゃない考え方もあるってこと？」

「ああ。だって、この考えが正しければ、地球は自壊することになってしまう。星熊透生がこの星で生まれ、暮らしてきた人間ならね……それじゃあ異世界から僕がここに来る条件に当てはまっていないんだよ。異世界が一切関わっていないから」

「確かに、そりゃそう……か」

宇宙といえど同じ世界。だったら隕石だってこの世界産。

アルスクンが地球を救おうとしているのは、地球の危機に、異世界が絡んでいるからだ。

隕石や普通に地上で暮らしてきた透生は、もちろん条件に入らない。い。

ということとは、

「透生以外の黒幕がいるとか、当初言っていたみたいに、透生が超鬼の力ではなく異世界に関係する力を使っているとか、やっぱり隕石は別件でしたー、とか？」

「主催の透生本人がどこかで異世界人と入れ替わったとか、隕石に異世界人が乗り込んでいるとか……。考えたらキリがない。

あと、主催者の超鬼の力があまりにも強過ぎるのも疑問点だ。

主催者がネットゲームをどうやって作ったか。

それからどうしてこのタイミングでゲームを始めたのか。

そもそも超鬼の力とは具体的にはどのような力なのか。

情報が足りないんだ。ネットゲームや主催者、それから異世界と

この世界、君と地球に訪れる危機との関連性……。とにかく今は、情報が欲しい」

そういうと、アルスくんはじつと私を見た。

……いや、見られても。

「あの、私に情報収集しろとか言われても無理だよ？」

人脈も狭いし、大体質問の内容が一般の方々には受け入れられない訳でして。

「言う前に断られたか……。けどユイナ。君は地球の運命を担っているんだ。君の周囲にヒントが転がっている可能性は極めて高い。だから」

アルスくんは一瞬だけ目を逸らすと、煮え切らない告白のように、躊躇いつつ言った。

「明日から、いや、何なら明日だけでもいい。その、何だ。……君を尾行してもいいかな」

## 異常者と異世界人・肆

前回のあらすじー。尾行されることになりました。

「どうやって?」

だって登下校時以外は高校にいるんだよ、私。尾行といっても、学校の外だけじゃあ意味無いと思うし……。

で、だからといって、生徒じゃないアルスくんが学校の中に入るのは、色々と問題もある訳で。

「そもそも君って学校のこと分かるの?」

「もちろん。部外者が侵入し難いのもちゃんと知っている。大丈夫。尾行するのは僕じゃなくて、こいつだ」

アルスくんがポケットの中から取り出したのは、なんと、ゴキブリだった。

「ひょ」

びっくりして勢いよく退いて壁に頭を打った。変な声は漏れたけど、大袈裟な悲鳴とか出さないよ。むしろ絶句だよ。

「あれ、ごめん、苦手だった?」

「苦手じゃなくてもビックリするでしょうが普通……。いや苦手だけど」

それとも、異世界では突然ゴキブリを差し出すのも普通なのかな。これが私を尾行する……。って。確かに虫なら人よりは学校に侵入し易いけど。

「一応言っておくけど、これは虫をモチーフにした機械であって、本物ではないからね。平たく言えば尾行マシンかな。

この虫には隠しカメラとマイクが付いていて、人工知能も内蔵されている。で、こいつが得た動画や音声は、こっちの受信装置に送られるんだ」

アルスくんが十年くらい前の携帯ゲーム機……。のようなものをポ

ケットから取り出す。何っーか、ポケットに何でも入るんだなーと感心する。

「短所は通信距離かな。この二つが通信出来る距離は二百メートル程度。そして、この機械には録画機能が付いていない」

ちなみにここから学校までの距離は……まあ、少なくとも一キロはあるかな。

「だから、結局僕がこの受信側を持って尾行しないとイケないんだよね」

「しょぼ！」

仮にも異世界間を移動する技術を持つ世界の産物……にしては随分不便だよな。

「この世界にあまりにもそぐわないモノを使ってしまうと、文化や常識を壊しかねないから……」

言い訳なのか事実なのか知らんけど、アルスくんは苦笑いしながら言った。

「君の存在自体が、文化や常識を壊している気もするんだけど……」

「それはまあ……優先順位の問題もあるよ。尾行することによるメリットと常識を壊してしまうリスク、どちらが大きいかといえればリスクの方だからさ」

常識を壊すことにメリットは無いのかな、とちょっと思う。

壊れた世界の方が、何か面白そうじゃなか。

冷たい雨が降り続く朝。家を出て通学路を歩く。

不便。しょぼい。駄目駄目。と思われたゴキブリ型のソレだけど、意外にも実用性は高いみたい。

飛んでも羽音はしないし、踏まれても轢かれても大袈裟なダメージは無く、雨に濡れても平気らしい。ついでによく見たら自爆装置

が付いているというオマケ付き。

目立った弱点は、この虫が地上を進む時、カメラがどうしても下から上を見下ろす形になることくらいかな。

……制作者がスケベだったとか……かもね。

教室では、ソレは私の鞆の中に隠しておいた。カサカサ走り回られたら気付かれるっていうのもあるけど、女子高生がいっぱいいるからね。うん。余計な心配かな。どうなんだろう。

教室は当然だけど、いつもと同じだった。瀬尾さん達が楽しそうに話していて、春風はまだ来てなくて、光村さんは静かに文庫本を読んでいる。

……こんな平凡な場所で、私だけが重大な秘密を持ち込んでいる。地球を救う為にゴキブリ大作戦ですよ。

私から二百メートル以内のどこかでは、鞆からの教室の風景をアルスくんが見ててさ。私はこのゴキブリが他の人に見つからないように頑張ってるさ。

いや、むしろ見つけられて「だめ、これは秘密なの！ 私が地球の運命を担っているなんて言えない！」なんて展開もアリかもね。妄想は止まりませんよ。

でもそんな都合の良い妄想はどうせ現実にはならず、ちょっと期待外れで一日が終わるっていうのも、私はちゃんと理解している。

……つもりだったんだけどなあ。

ハプニングも一切無く、簡単に一日終了。問題は動画や音声がちやんとアルスくんが届いたかどうかなんだけだね。そんな味気無い心配しか残ってないのかよおお。

「あー……。いけんわ。何がいけんって……。いけんわ」  
独り言も出ますよそりゃ。

サンタさんは幻なんだよ。でもちよつとは期待しちゃうじゃないですか。期待してちよつとソワソワして、あとで自棄に落ちこんじやうんです。

そんな心境。そういえば今日は金曜。普段ならはしゃいでる日なだけでね。

土日は透生主催のネットゲームをやるチャンスですよ。地球救済に一步前進じゃん。でもなんか、それも悲しいんだよねえ。ゲームの為に生きているみたいで。

「……退屈」

多分、今最も確に私を表す二字熟語。平凡とか一般とか、他にも色々あるけどね。

すっかり雨も止んで、結局今日も平和な一日。いつもの川沿いの道で、溜息つきながら歩いてる。

川のせせらぎ、名前も知らない虫の声。緩やかなカーブを進み…。

さて、ここで絶句である。

なぜかって、角を曲がると目の前にホッキョクグマがいたからだ。……またかよ」

二度目にもなると、流石に大きな驚きはなかった。

「仮にも命を狙われている分際で、何とも失礼な反応デスネえ」  
不敵な笑みを浮かべる白クマさん。

「というか、何で白クマなの？」

「人型よりも身体能力が優れているのデスヨ。テクニクの人型とパワーの獣型。使い分けテいるという訳デス」

「へえ。で、何で私の命を狙うの？ 計画って言うってたけど、何か企んでたり？」

「質問攻めでカマをかけようとしても無駄でスヨ！」  
そんな風に聞こえたんだ。

「……ごめん、なんかもう、色々と若さ故の悩みみたいなのが頭ん中ぐるぐる回っててさ。白クマが出たくらいでビックリしないんだよね……」

「いいでシヨウ。その挑発、ノリマスヨ！」

……え。挑発になっちゃった？

「本気ヲ出します！ 勝てるものナラ勝って御覧ナサイ！」

「ちょ、ちよつと、本気つてすごいのか？ ……すごいか」

……いやいやいや。

よくよく考えたらすごいピンチな訳で。超能力とか変身とか野生のパワーとか色んなものを駆使して戦う変人に命を狙われているのですよ私。

喧嘩して勝てる相手じゃないし、逃げ切る自信もない。

これはあれだ。……ピンチだ。

「タイラント北極タツクルうううう！」

「ぎゃああ！ こつち来んなああああ！」

くまさんはまるで車のように、勢いよく私に向かってくる。もはやクマじゃない。超人的アメフト選手の動きだよ多分。スピードも勢いも凄まじい。

ただ細かい動きは苦手なのか、ひよいと横に移動すると、そのまま、白クマさんは勢いよく私を通り過ぎていった。

案外楽勝？ いや……どうだろ。あまりの拍子抜けに、ポカンとしている……。

白クマさんがタツクルしながら戻ってきた。

「ぎゃああああ！」

絶叫しつつ避ける。近所の人が警察を呼ぶか……それか、アルスくんに期待するか。策はそれくらいしか思いつかない。

「ハツハツハ、所詮は小娘、一人デ八何もテキナイようだナ！」  
戻ってくるのをまた避ける。白クマさんはもう一度、ダッシュで私を抜いていく。

そこで悟った。……あれだわ。これ、往復しなはずと続くやつだ。

タイラント北極タツクル……。名前は間抜けだけど、走ってくる熊さんは、もはや車か、それ以上のスピードでさ。

だったらあれを喰らうのって、車に轢かれるようなもんじゃなか。

### 三回目。

まだいける。余裕を持って受け流す。

### 四回目。

運動量は少ない訳だし、集中していれば何とかなるけど、

### 五回目。

結構さ、終わりが見えないのって嫌なんだよね。

### 六回目。

それで……反撃さえ出来ないんだ。

川があって、反対側には塀があって民家があってそのずっと先には山があって。

そんな、人の気のない小さな一本道。横には進路がない訳だから、熊の射程範囲外に逃げることも敵わず。

避けて、走ってきて、避けて、走ってきて、避けて……。攻撃は終わらない。

だんだん一発ごとの時間の感覚が狭まってきて、小回りも利くようになってきている。速度もちょっとずつ上がってきて、さながらトラックの如しですよ、ええ。

一方、私は逆に、余裕が徐々に無くなってきている。疲労もただ、この状況を打破することが出来ない事実が精神的に重たい。

「ねえ、ちよつと……。もう許してくれない……。？」

基本的には斜に構えてないとやってられないスタンスな私だけど、流石にふざけてられない。

これは、本当にヤバい。

状況を変える方法。受け止める？ 打ち返す？ モノで防ぐ？

説得？ 全部駄目だ。

こんな時、浮かんでくるのはネガティブなことばかりでさ。

……私が力尽きて、あのタックルをモロに食らったとしたらどうなるんだろう。

大怪我……。それとも、一発で死ぬのかな。

死んだら私は……。どうなるんだろ。

そんなことを思った瞬間、集中が切れたことが自分でも分かる。

死んだその先なんて知らないけどさ、

それを知る術は、目の前にあった。

最初とは比べ物にならない程のスピードでさ。熊の顔した絶望が向かってくるんだよ。

その一瞬、私の見ている全てがスローモーションになって、直後。

諦め、絶望、悔恨、悲哀。

激痛。全身を駆け巡った。

「……………」

吹き飛んで、川に落ちて。

死んではないけど、死ぬほど痛かった。致命傷、かも、知れない。「サア、そろそろトドメデス！」

勝利を確信して、白クマが川に飛び込んで来る。

情けないけど声が出ない。恐怖と痛みが激しくて、もう諦めようかと思った。

無理。

もう……ね。アルスくんと出会う前は、人生リタイアする気満々だった訳だし。

もしかしたら全部が夢なんじゃないかって希望もちょっと持ちながら。

……私は、目を閉じた。

アルスくん、来てくれなかったなあ……。

異常者と異世界人・肆（後書き）

続く……。

## 紅蓮の貴公子・イ

「……鞆の中かな、これ」

須上結菜から2百メートル以内にある、どこかの公園。雨は止んだが、曇っていて夕陽は見えない。

携帯ゲーム機……のような受信機に映った闇を見つめ、アルスは溜息をついた。

教室にいる間は、カメラで外を覗ける程度の隙間を作ってくれていたのに、今は密閉状態。多分、いつもの癖で閉じ切ってしまったのだろう。

闇、闇、闇……。むしろ、問題は音声の方である。

「白クマが出たくらいでビックリしないんだよね……」

「本気ヲ出します！ 勝てるものナラ勝って御覧ナサイ！」

「ちょ、ちよつと、本気つてすごいのか？ ……すごいか」

「タイラント北極タツクルうううう！」

「ぎゃああ！ こつち来んなああああ！」

「ハツハツハ、所詮は小娘、一人デ八何もテキナイようだナ！」

「一体、結菜に何が起きているんだ……！」

彼にとつてはここは異世界。時には驚かされたり、困惑することもあるだろうと覚悟していたが。

「……タイラント北極タツクルって何なんだ!？」

タイラントは暴君の意。北極はこの星の地名で、タツクルは……組みついたり、体当たりしたり……。

戦いの最中？ 暴漢に襲われたとか？

しかし、友達との談笑ということも有り得ないことではない。ふざけ合った結果の取っ組み合いとか。

気にはなるが、自分が向かっていいのだろうか……。アルスの心は無駄に揺れ動いていた。

テスト直前のようにそわそわしていた……。その時。

どん。

受信機が音を伝える。何かがぶつかり合ったような、鈍い音だった。

ばしゃん。

水の音。飲んだ？ 浴びた？ 叩いた？ いや……。叩きつけられたような。

何が起こったのかは分からないが、結菜の通学路に川があったことをアルスは知っている。

……。徐々に、彼の心に嫌な風景が思い浮かぶ。その、些細な想像でしかなかったものは、

「サア、そろそろトドメデス！」

その瞬間、確信へと変わった。

戦っているんだ。何者かと、川の付近で。

何をやってんだ僕は。

何よりも優先しなければいけないのは、この星と、それを救う結菜の安全じゃないか。

「無事であってくれよ……」

助けなければ。

彼が地面に、軽く爪先を叩きつける。瞬間、彼は炎に包まれた。彼が使うこの「乗り物」は、十分にこの世界の文化を一変させるものだ。が、優先すべきはもはや、文化や常識ではなかった。

位置情報は尾行マシンで確認済み。常人離れした視力なら、着陸地点もすぐに割り出せる。

燃えて、飛んで、倒れている結菜に飛びかかる白クマを敵と認識。ヒーローの如く、急降下しながら敵を蹴り飛ばす。

「ゴボエエエエエ！？ な、ナニゴトでスカ！」

その間、約三秒。白クマは、おそらくまだ状況を掴めていないだろう。

黒服の燃え盛る少年を見つけても尚、彼は困惑の表情を浮かべている。

「い、今の八お前の仕様デスカ!？」

「ええ、まあ……。ひょっとして、三日前にも彼女のことを襲いましたか？」

「何故ソレを……。いや、あまり重要ナ秘密でもナイのデスが」

「……瑞樹さんの言っていた”ホツキョクグマ”って、こういう動物だったんだ……」

余裕の表情を浮かべるアルスだったが、内心では彼も焦っていた。

……ユイナが倒れている。

大きな外傷も見当たらず、大したダメージを負ってはいないように見えるが……。彼女に万が一のことがあれば、この星は終わりだ。

「あの、忠告です。出来れば戦わず、急いで僕から逃げて下さい」  
戦っている時間も惜しい。勝てないことはないだろうが、超能力を使われると厄介だ。戦う時間も惜しい。

「そういう訳にもイキマセン。オレは組織の為、その娘を亡きモ

ノにシなければナラナイのです」

「明日でも良いじゃないですか。とにかく今は見逃して下さい。でない」と手加減出来ませんよ」

早く終わらせないと……。だが、その方法が見つからない。

喧嘩の勝ち負けなど、どうでも良い。だが、結菜が命を落とすことだけは避けなければならぬ。

とにかく時間がない。早急に片を付けなければ……。

「あ」

そこでアルスは気付く。自分と相手の目的が、綺麗に対を成している。

アルスにとって最悪のケースこそ、相手にとっては最善のパターンとなるんじゃないか……。

「……考えてみれば、オレはこうして時間稼ぎをするだけで勝てるじゃありませんか」

「くそ、どうして気付くタイミングまで重なるんだ。時間稼ぎなんて卑怯だとは思わないんですか！」

「頭脳プレイと言って下サイ」

「だったら僕から仕掛けますよ！」

アルスは「乗り物」を左手に集める。風が、熱が。そこに集まる。

「火を、投げます。燃えたくなければ逃げて下さい」

「逃げよううううううう！」

宣言どおり、アルスの左腕から火の塊が放たれる。だが、それだけだ。

「避けレバ済む話じゃないデスカ」

それだけだ……。とは、大きな誤算であった。

「何故、追尾してクルのデス!？」

炎はブーメランのように曲がり、白クマの身体をあっけなく捉えた。

「異世界製の特別なものですから。……本来、乗り物として使うものなんですけどね」

炎は白クマを焼き尽くし、再びアルスの左手に戻っていく。

「……終わりですね？」

返事はない。

死んではいけないだろうが、少なくとも戦意は奪った。……ひとまず、アルスは安堵する。

「……と、ボーっとしてる場合じゃない」

倒した敵のことを考えている余裕はない。とにかく助けなければ。だが、彼に医学の知識はない。

魔法が使える訳でも、薬を持っている訳でもない彼は、怪我人の前ではただの人間だった。

「乗り物」には厳しい重量制限があるので、今すぐ病院へ……という訳にもいかない。

「……ユイナ、ユイナ！」

意識は無い。水に浸かっていた為、体温は分からない。

神などいないと知ってはいるが、それでも神に祈りながら心臓を調べ……。

「……駄目だ、死んでる……」

「心臓は左側ですよ、その人」

後方から声がした。

振りかえると、道路から川を眺める少女が一人。どこか目付きが暗く、まるで人形のような表情だった。着ているのは結菜と同じ制

服。同級生かも知れない。

彼女は川に飛び降りると、結菜からアルスを引き離し、それから結菜の息や脈を調べ、呆れたように溜息をついた。

「死んではないが、重体だな。何があった」

「……本人にしか分からないことです」

「よほど強い衝撃を受けないと、こんなに酷くはならないと思うが……。骨折、内臓の損傷、内出血。この怪我は普通ではない。

だが、須上さんは悪運が強いようだ。私なら手助け出来るかも知れんぞ」

「……何者ですか、アンタ。ユイナのことを知っているんですか？あまりにも都合の良い話に、アルスは疑いの目を向ける。

「クラスメイトの魔法使い、あるいは超能力者だ。決して鬼の力を使う悪人ではない」

「随分変わってますね……」

「疑うのなら見ている。完治は無理だが、死なせはしない」  
そう言うと、自称魔法使いはかざした掌に力を込め……。

光を起こした。と思うと、バチバチと電気の音が聞こえて……。

「電気！？」

アルスのいた世界では、魔法は少なくとも身近なものではなかった。彼に魔法の知識は皆無だが、

どう見ても、彼女のやっていることは「治療している」という感じではない。

「あ、あの？ 見ていて物凄く不安なんですけど」

「治癒力を爆発させているんだ。寿命は五年……いや、もしかする

と十年程度縮むかも知れないが、今死ぬよりはマシだろう」

「治療力……ですか。魔法って、そういう感じなんですか？」

「少なくとも私の魔法はな。他は知らん」

……どこことなく投げやりな言動。この自称魔法使いは非常に怪しい。

だが、考えてみればそもそも自身が一番胡散臭いのだ。他人を信じられないものが、どうして他人から信頼を得られようか。

「あとこれは魔法だ。決して鬼の力なんかではないからな！」

「必死ですね。実は鬼の力……とか」

「断じて否」

「名前だけでも聞かせてくれませんか」

「名乗るほどの者ではない。……それより、背中を頼めるか？ 何かいるだろう」

背中？ アルスが振り向くと、

白クマのいた場所に、異様に鼻の長い男が立っていた。トレンチコートに身を包んだその姿は、見る者に清潔感を与える。

「だ、誰だ」

「分かれますええ！ 貴様にやらしたホツキョクグマデスヨ！」

「……あの炎を喰らって、まだやるうっていうんですか」

「アレくらいデ果てるモノか断じて！ シかし、モウ許しませんよ。サイキックで三人とも葬って差し上げまショウ！」

「やはり、私も入ってしまうのか……」

ひっそりと、目を付けられないように治療を続けていた光村は、自分の不運さを恨むのであった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8909m/>

---

須上ユイナの地球救済

2011年10月11日08時07分発行